

第3次佐賀市スポーツ推進計画について

(答 申 案)

令和7年2月28日

佐賀市スポーツ推進審議会

# 目 次

---

## 第1章 スポーツ推進計画策定にあたって

- 1 計画策定の趣旨 . . . . . 1
- ◎ スポーツの価値 . . . . . 1
- 2 計画の位置付け . . . . . 2
- 3 計画の期間 . . . . . 2
- 4 スポーツの定義 . . . . . 2

## 第2章 スポーツ推進施策の概要

- 1 スポーツを取り巻く本市の現状と課題 . . . . . 3
- 2 スポーツ推進の方向性とめざす姿 . . . . . 4
- 3 目標達成のための成果指標 . . . . . 4
- 4 スポーツ推進の基本方針と施策 . . . . . 5
  - (1) 「する」スポーツの推進
  - (2) 「みる」スポーツの推進
  - (3) 「ささえる」スポーツの推進
- 5 スポーツ推進施策の体系図 . . . . . 6

## 第3章 スポーツ推進施策の内容

- 1 「する」スポーツの推進 . . . . . 7
  - (1) 多様な形の「する」スポーツの推進
  - (2) 利用者のニーズに対応できるような環境整備
  - (3) レガシーの活用
  - (4) 「する」スポーツの情報発信
  - (5) 「する」スポーツによる地域振興
  - (6) 相乗効果による「する」スポーツの推進
- 2 「みる」スポーツの推進 . . . . . 15
  - (1) 「みる」スポーツの機会創出
  - (2) 観戦者のニーズに対応できるような環境整備
  - (3) 「みる」スポーツの情報発信
  - (4) 「みる」スポーツによる地域振興
  - (5) 相乗効果による「みる」スポーツの推進
- 3 「ささえる」スポーツの推進 . . . . . 19
  - (1) スポーツを「ささえる」人材の確保
  - (2) 「ささえる」スポーツの情報発信
  - (3) 「ささえる」スポーツによる地域振興
  - (4) 相乗効果による「ささえる」スポーツの推進

- 資料編 . . . . . 24

# 第1章 スポーツ推進計画策定にあたって

## 1 計画策定の趣旨

本市は、平成 21 (2009) 年度に「佐賀市スポーツ振興基本計画」、平成 26 (2014) 年度に「(第 1 次) 佐賀市スポーツ推進計画」、平成 31 (2019) 年度に「第 2 次佐賀市スポーツ推進計画 (以下、「前計画」)」、を策定し、“市民誰もが生涯を通じてスポーツに親しむことができ、いきいきと暮らしている～スポーツで「私」が輝く! 「地域」が輝く! ～”を目標としたスポーツ推進を行ってきました。

一方、国では、令和 4 (2022) 年に「第 3 期スポーツ基本計画」が発表され、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会 (以下、「東京オリ・パラ」) のレガシーの承継・発展に加え、スポーツを通じた健康寿命の延伸や地域社会の活性化とライフステージに応じたスポーツ参加機会の拡充が重視されています。また、障がい者スポーツの推進、女性や高齢者の参加促進、国際競技力の向上に焦点を当て、さらには、学校や地域、職場でのスポーツ環境の整備や、地域間・国際間でのスポーツ交流を推進し、持続可能な社会の構築を目指すことが示されています。

本計画は、前計画の成果と課題を整理し、“スポーツの価値”に着目し、令和 6 (2024) 年に本県で開催された国民スポーツ大会 (以下、「国スポ」) 及び全国障害者スポーツ大会 (以下、「全障スポ」) のレガシーの承継・発展と上述した国の計画及び本県のスポーツ施策・取組を踏まえ、今後 5 年間におけるスポーツ推進の基本的方向性として策定するものです。

### ◎ スポーツの価値

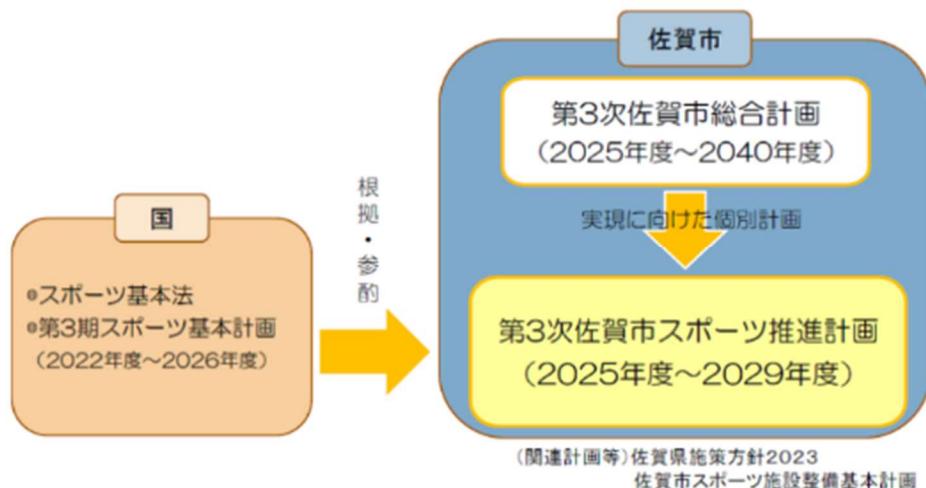
スポーツには、自発的なスポーツとの関わり方を通して得られる楽しさや喜びなどの「スポーツそのものが有する価値」と、スポーツを通じた地域振興やコミュニティ形成、健康増進社会の実現、経済発展、国際理解の促進など「スポーツが社会活動等に寄与する価値」があります。

本計画では、スポーツを広く捉え、年齢や性別、障がいの有無にかかわらず、多様な主体における「する」「みる」「ささえる」といった様々なスポーツ機会の質的向上と、プロスポーツや大規模スポーツイベント等を活用した経済的効果、市民のウェルビーイングの向上とシビックプライドの醸成などの社会的効果を促進していくこととします。



## 2 計画の位置付け

本計画は、スポーツ基本法に基づき、国の「第3期スポーツ基本計画」を参酌しながら、「第3次佐賀市総合計画」が掲げる2040年の将来像『佐賀らしさでみんなが上を向くまち』の実現に向け、本市の特色と実情に即したスポーツ推進のあり方を総合的に示したものです。なお、この計画は、スポーツ基本法第10条に規定する「地方スポーツ推進計画」として位置付けるものです。



## 3 計画の期間

令和7（2025）年度から令和11（2029）年度までの5年間とします。また、本計画に基づく施策の実績、成果や課題等を、毎年度、佐賀市スポーツ推進審議会で報告を行い、進捗状況を把握・評価しながら、必要に応じて計画の見直しを行います。

	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	～	(年度) 2040
第3次総合計画	[Blue arrow spanning from 2025 to 2040]									
第3次スポーツ推進計画	[Yellow arrow spanning from 2025 to 2029]									
スポーツ施設整備基本計画	2018～		[Green arrow spanning from 2018 to 2023]							
【国】第3期スポーツ基本計画	2022～		[Purple arrow spanning from 2022 to 2026]							

## 4 スポーツの定義

スポーツという言葉は、「気晴らしや楽しみ」といった要素を指すラテン語とされ、国の第3期スポーツ基本計画でも、スポーツには、競技スポーツに加え、散歩やダンス・健康体操、ハイキング・サイクリング、野外活動なども含まれ、文化としての身体活動を意味する広い概念であると示されています。

これらを踏まえ、本計画では、各種球技や陸上競技、水泳などのいわゆる競技スポーツや柔道、剣道などの武道に加え、レクリエーションやウォーキングなどの健康づくりのための運動、サイクリングなどアクティビティとして楽しまれているスポーツ、アーバンスポーツなども計画の対象と捉え、「する」だけでなく、「みる」「ささえる」を含めた3つの視点をもとにスポーツを推進していきます。

## 第2章 スポーツ推進施策の概要

### 1 スポーツを取り巻く本市の現状と課題

本市では、前計画期間において、子どものスポーツ推進、ビジネスパーソン・女性のスポーツ推進、高齢者のスポーツ推進、障がい者のスポーツ推進、地域のスポーツ活動の推進により、市民のライフステージに応じた健康・体力づくりを進めるため、誰もが、いつでも、どこでも、いつまでもスポーツができる環境づくりを推進し、スポーツ実施者数の増加に向けて取り組んできました。

また、国スポ・全障スポに対応した施設整備として、富士しゃくなげ湖水上競技場の施設整備を行い、国スポ・全障スポ大会開催後もスポーツ合宿の誘致などを推進しています。

このように、「市民誰もが生涯を通じてスポーツに親しむことができ、いきいきと暮らしている」を目指す姿として実施してきた様々な取組により、「日常的に運動・スポーツをしている市民の割合（スポーツ実施率）」は増加傾向にあるものの、目標には達していない状況です。一方で、国スポ・全障スポの開催を機に、大会を支えるボランティアとしての参加や競技を観戦・応援するなど、「する」だけでなく「みる」や「ささえる」を通してスポーツに触れる機会が増えています。

これらの取組結果を踏まえ、本市のスポーツを取り巻く現状と課題を次のとおりとします。

#### 現 状

#### 課 題

スポーツを取り巻く環境の変化	<ul style="list-style-type: none"><li>・スポーツに参画する（する・みる・ささえる）人や、スポーツに関する活動を支える担い手不足</li><li>・部活動の地域展開による受け皿づくり</li></ul>
スポーツに触れる機会の不足	<ul style="list-style-type: none"><li>・スポーツの魅力を伝える情報発信の不足</li><li>・トップレベルの選手等をみる機会や交流の場の不足</li><li>・他分野、他団体との連携</li></ul>
多種多様なスポーツへの関心の高まり	<ul style="list-style-type: none"><li>・アーバンスポーツなど新しいスポーツに対する理解の不足</li><li>・練習する場所、施設の不足</li></ul>
プロスポーツチームへの関心の高まり	<ul style="list-style-type: none"><li>・プロスポーツチームの活用</li></ul>
SAGA2024 国スポ・全障スポ大会	<ul style="list-style-type: none"><li>・大会のレガシー活用</li></ul>

## 2 スポーツ推進の方向性とめざす姿

本市の現状と課題等を踏まえ、市民のライフステージに応じた健康・体力づくりを進めるため、誰もが、いつでも、どこでも、いつまでも「する」「みる」「ささえる」スポーツに関わることのできる環境づくりに向けたスポーツ推進の2つの方向性を示します。

### 1) 「する」「みる」「ささえる」スポーツのさらなる推進（スポーツの推進）

一人ひとりが、自分に合った形でスポーツへ関わり、誰もが、いつでも、どこでも、いつまでもスポーツに関わることができる環境づくりを推進します。

### 2) スポーツのチカラを地域の賑わいやまちづくりに役立てる（スポーツの活用、他分野・他団体との連携）

スポーツで地域住民がつながることで、地域の課題解決につながり、心豊かに暮らせるまちを目指します。また、プロスポーツチームが身近にある強みを活かして、他分野・他団体と連携し、スポーツを通して市民が一体感や幸福感を感じ、夢や誇りを持てるような取組を行います。



## スポーツ推進のめざす姿

市民は、する・みる・ささえるのさまざまな関わり方でスポーツを楽しんでいる

## 3 目標達成のための成果指標

「スポーツ推進のめざす姿」を達成するため、次の2つの成果指標とその目標値を設定します。1つ目は、『日常的に（週1回以上）運動・スポーツをしている市民の割合』を54.5%から60.0%へ、2つ目は、『「する」「みる」「ささえる」のいずれかでスポーツに関わった市民の割合』を85.0%とします。

成 果 指 標	基準値	目標値
	2023年	2029年
日常的に（週1回以上）運動・スポーツをしている市民の割合	54.5% 注1)	60.0%
「する」「みる」「ささえる」のいずれかでスポーツに関わった市民の割合	— 注2)	85.0%

注1) 令和6(2024)年実施 「佐賀市民意向調査」

54.5% = 「行っている (32.8%)」 + 「ときどき行っている (21.7%)」

その他の選択肢は、「あまり行っていない (21.9%)」、「全く行っていない (23.3%)」、「無回答 (0.3%)」。

注2) 令和7(2025)年「佐賀市民意向調査」から、新たな項目として追加調査する。

## 4 スポーツ推進の基本方針と施策

成果指標目標値達成に向けて、「する」「みる」「ささえる」による3つの基本方針と、「推進」「活用」「他分野・他団体との連携」からなる3つの基本施策を定め、これら9つの視点からスポーツ推進に取り組みます。

### (1) 「する」スポーツの推進

市民がスポーツを楽しみ、健康的な生活を送る環境づくりを目指します。子ども、女性、高齢者、障がい者それぞれに合った「する」スポーツの機会を提供し、地域や企業をはじめ、他分野・他団体と連携してスポーツ活動を推進します。さらに、競技スポーツの推進にも取り組み、スポーツ実施率の向上を目指すと同時に、スポーツを活用した地域の振興も図ります。また、効果的な情報発信を通じ、スポーツ体験や施設の利用情報を広め、市民が気軽に「する」スポーツに参加できる環境を整えます。

### (2) 「みる」スポーツの推進

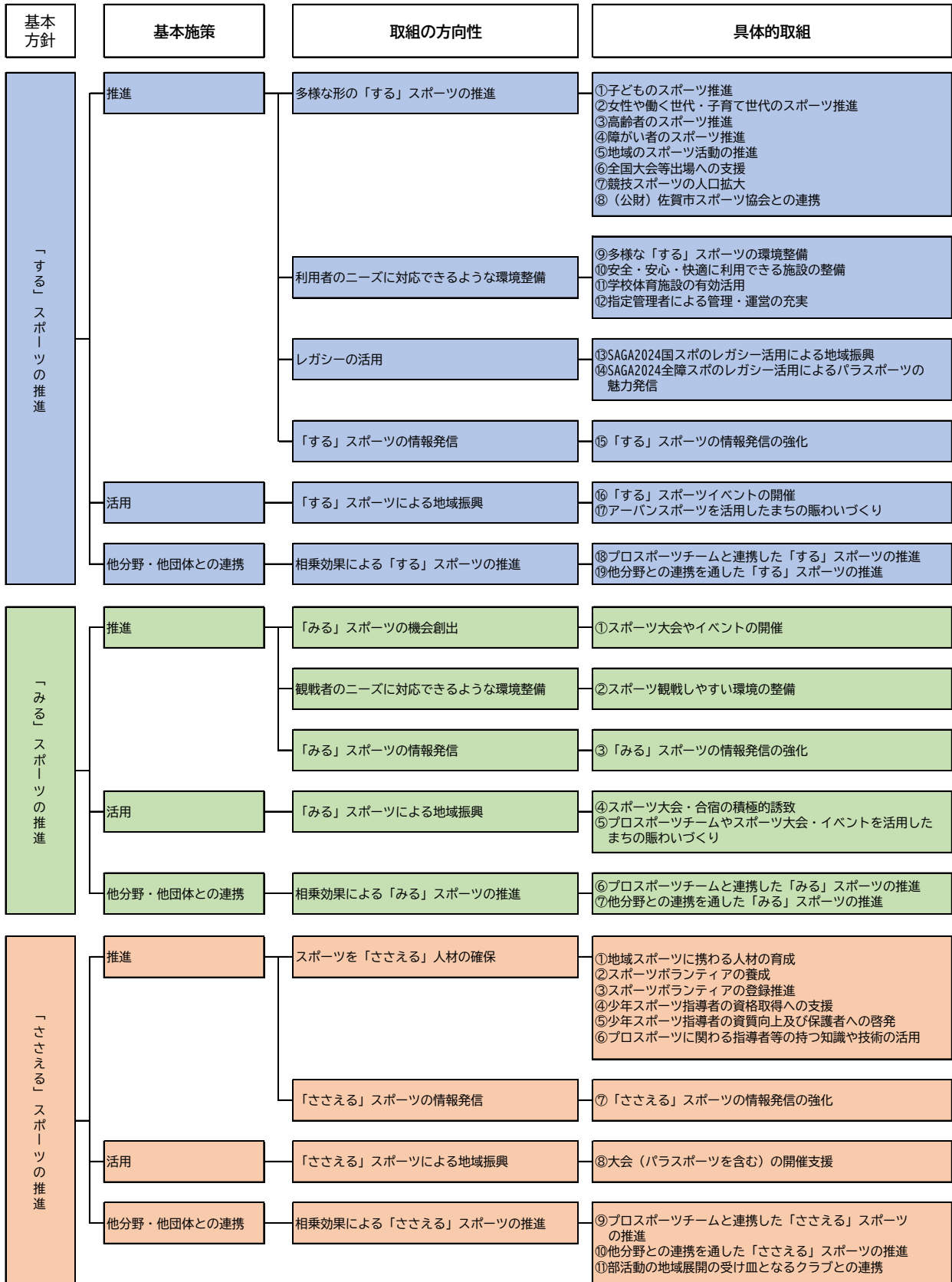
魅力あるスポーツ大会やイベントの開催を通じて、市民が「みる」スポーツを楽しむ機会を増やし、地域の振興を図ることを目指します。また、スポーツを観戦しやすい環境づくりに取り組みます。さらに、SNSなどを活用した効果的な情報発信により、観戦機会を広げ、プロスポーツチームや他分野・他団体との連携を強化することで、交流人口の拡大とまちの賑わいを促進し、地域や経済の振興を図ります。

### (3) 「ささえる」スポーツの推進

地域のスポーツ活動を支える人材の育成と、スポーツ大会等の開催を含めた支援体制の充実を目指します。スポーツ指導者やスポーツボランティア<sup>注3)</sup>の発掘・育成、登録推進を行い、資格取得や啓発活動を通じて資質向上を図ります。また、プロスポーツチームの知識や技術を活用して地域の指導力を高めるとともに、効果的な情報発信を行い、ボランティア活動の重要性を広めます。さらに、企業や他分野・他団体との連携を強化し、地域の「ささえる」スポーツ環境の整備を促進します。

注3) スポーツボランティアとは、地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において、日常的に支えたり、大会で会場準備や参加者受付、受付補助など大会の運営を支える人です。

## 5 スポーツ推進施策の体系図



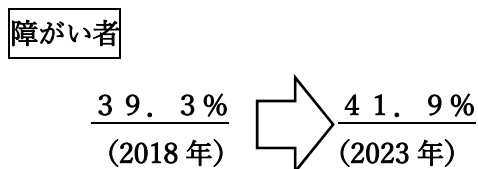
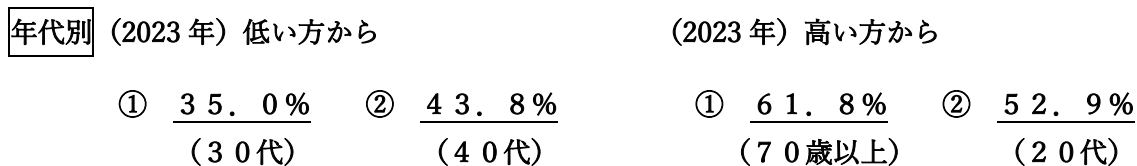
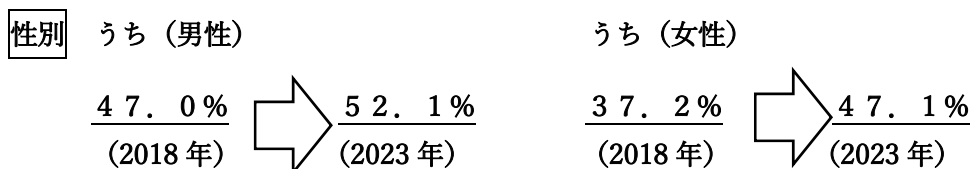
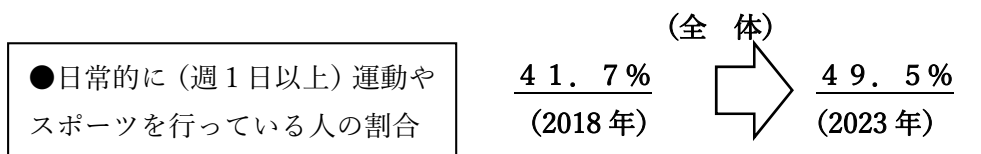
### 第3章 スポーツ推進施策の内容

#### 1 「する」スポーツの推進

##### (1) 多様な形の「する」スポーツの推進

###### 【現状と課題】

日常的に（週1日以上）運動やスポーツを行っている人の割合は、5年間で大きく上昇したものの、目標（60%）との乖離が見られます。



###### ●運動・スポーツしない理由

「仕事や家事が忙しいから」約5割

###### 【目標】

年代・障害の有無などに関わらず、市民がスポーツに親しみ、健康的な生活を送ることができる環境を整え、スポーツ実施率の向上を目指します。

## 【具体的取組】

### ① 子どものスポーツ推進

子どもがスポーツに対する苦手意識を持たず、大人になってもスポーツを続けていけるように、幼少期から体を動かす体験等の機会を設けるなど、子どものスポーツ実施を推進します。

### ② 女性や働く世代・子育て世代のスポーツ推進

スポーツ実施率の低い層に対して、課題と対策を明確にし、企業と連携した事業の展開や、ニーズに対応した参加しやすい教室等を実施するなど、スポーツ実施率の向上を図ります。



### ③ 高齢者のスポーツ推進

健康・体力の保持の観点から、ニュースポーツなど、体力の低下に配慮したスポーツを継続できる事業を実施します。

そのため、各地域において徒歩圏内のスポーツレクリエーション活動を行い、在宅でもできるスポーツについても、普及啓発していきます。

### ④ 障がい者のスポーツ推進

障がい者が地域の身近な場所でスポーツが実施できるよう環境を整備し、スポーツをするきっかけづくりに取り組めます。また、障がいの有無にかかわらず、一緒に参加できるスポーツ行事を実施します。



#### ⑤ 地域のスポーツ活動の推進

スポーツを通じた地域住民の交流を促します。また、外国人留学生や外国人労働者も、地域でスポーツを楽しめる環境作りを進めます。これらのため、スポーツ推進委員協議会をはじめ、校区体育(スポーツ)協会、競技団体、総合型地域スポーツクラブやまちづくり協議会が連携し、それぞれが実施するイベント等の情報を共有していきます。

#### ⑥ 全国大会等出場への支援

社会体育で活動している小中学生の九州・全国大会等への出場に対し、支援を行います。

#### ⑦ 競技スポーツの人口拡大

少年期において、様々なスポーツに触れる機会を創出し、スポーツ実施率の向上を図ります。そのために県や関係機関と連携し、育成のための支援体制を整備します。

#### ⑧ (公財)佐賀市スポーツ協会との連携

本市の競技団体を統括している(公財)佐賀市スポーツ協会との連携を強化することで、競技スポーツを推進します。



## (2) 利用者のニーズに対応できるような環境整備

### 【現状と課題】

学校を含む市の施設の利用率が低くなっています。そのため、学校施設開放の周知や老朽化した施設の改修など、利用者のニーズにあった取組が求められています。

●学校施設開放の利用率	利用したことがある <u>24.4%</u>	利用できることを初めて知った <u>32.4%</u>
●運動・スポーツ実施場所	自宅・友人宅 <u>32.0%</u>	市立のスポーツ施設 <u>12.7%</u>
●市立スポーツ施設への要望	利用料金の引き下げ <u>13.6%</u>	運動やスポーツ教室の充実 <u>12.5%</u>
●市立スポーツ施設予約システム利用率	予約したことがある <u>7.5%</u>	

### 【目標】

利用者のニーズに応じたスポーツ環境の整備を推進し、安心・安全で快適に利用できる施設を提供します。具体的には、老朽化した施設の改修やユニバーサルデザインの導入を検討し、学校体育施設を市民がより活用できるような運営方法を検討します。また、行政と民間が協力して管理・運営を行うことで、サービスの向上と経営の安定を目指します。

### 【具体的取組】

#### ⑨ 多様な「する」スポーツの環境整備

今後需要が見込まれる利用者のニーズに対応できるよう環境の整備を検討します。

#### ⑩ 安心・安全・快適に利用できる施設の整備

老朽化に対応した改修や、ユニバーサルデザインの導入などの整備、空調設備の設置検討を行い、誰もが安心・安全・快適に利用できる施設の整備を検討します。



### ⑪ 学校体育施設の有効活用

市民にとって身近なスポーツ活動の場として、「学校体育施設開放運営委員会」と連携してより多くの市民が利用できるような運営方法の検討や見直しを行います。

### ⑫ 指定管理者による管理・運営の推進

行政と民間が協力し、きめ細やかなサービスの提供と経営の安定化を図ります。

## (3) レガシーの活用

### 【現状と課題】

令和6（2024）年に SAGA2024 国スポ・全障スポが開催され、市民のスポーツに対する関心がより一層高まりました。

大会会場となった体育施設の利活用と本大会がもたらしたスポーツへの関心の高まりを持続・発展させる取組が求められています。

### 【目標】

SAGA2024 国スポ・全障スポを契機に整備されたスポーツ施設を活用して地域振興を図るとともに、障がいの有無に関わらず、誰もが楽しむことができるパラスポーツ<sup>注4)</sup>の普及を促進します。

注4) パラスポーツとは、障がいのある人もない人も高齢者も、みんな楽しめる「もうひとつのスポーツ」です（ニュースポーツを含む）。

### 【具体的取組】

#### ⑬ SAGA2024 国スポのレガシー活用による地域振興

SAGA2024 国スポ開催に伴い整備した、富士しゃくなげ湖水上競技場をレガシーとして、合宿誘致や新たな利活用を図ることにより、地域振興につなげます。

また、地域イベントにおいて、デモンストラレーションスポーツで実施されたニュースポーツ体験の拡充を図り、地域交流の促進を図ります。



#### ⑭ SAGA2024 全障スポのレガシー活用によるパラスポーツの魅力発信

SAGA2024 全障スポ開催で改めて注目されたパラスポーツの魅力を継続的に情報発信していきます。



#### (4) 「する」スポーツの情報発信

##### 【現状と課題】

市民の情報入手先として、テレビや市報が5割を超えているが、特に若い世代に対してはSNSを活用した情報発信の強化が必要となっています。

●市のスポーツ情報の収集手段	テレビ	市報	新聞・雑誌
	56.4%	51.1%	32.7%

##### 【目標】

「する」スポーツの機会充実につながる効果的な情報発信の強化を目指します。

##### 【具体的取組】

#### ⑮ 「する」スポーツの情報発信の強化

スポーツ体験会・教室やスポーツ施設以外でも運動できる場所の情報提供等を行い、気軽にスポーツを実施する機運を高めます。



## (5) 「する」スポーツによる地域振興

### 【現状と課題】

スポーツのチカラ（価値）を活用したまちづくりが注目されています。スポーツをする人を増やし、まちを元気にする取組が求められています。

### 【目標】

スポーツイベントやアーバンスポーツ等を活用し、交流人口の拡大による地域振興やまちの賑わいづくりを目指します。

### 【具体的取組】

#### ⑩ 「する」スポーツイベントの開催

さが桜マラソンや佐賀インターナショナルバルーンフェスタなどを開催することで、多くの人を呼び込み、スポーツによる交流人口の拡大を図ります。併せて、スポーツへの関心を高めることで、スポーツ実施者を増やすことにつなげます。

#### ⑪ アーバンスポーツを活用したまちの賑わいづくり

子どもや若者に人気があるスケートボードなどのアーバンスポーツを活用し、まちの賑わいづくりにつなげます。併せて、子どもや若者のスポーツ実施率の向上を図ります。



【佐賀新聞社提供】

## (6) 相乗効果による「する」スポーツの推進

### 【現状と課題】

スポーツは、健康、教育、まちの賑わいなど、多分野にポジティブな影響をもたらします。そうした他の分野と連携し、スポーツを推進するという視点も重要です。

● トップレベルのチームや選手との交流	ある	ない
	<u>12.9%</u>	<u>87.1%</u>

### 【目標】

プロスポーツチームや他分野・他団体と連携し、市民がスポーツを楽しむきっかけを提供することで、スポーツ実施率の向上を目指します。

### 【具体的取組】

#### ⑱ プロスポーツチームと連携した「する」スポーツの推進

市民がプロスポーツ選手等と触れ合い、体を動かすことの楽しさ等を実感する取組を行うことで、スポーツ実施者を増やすことにつなげます。

#### ⑲ 他分野との連携を通じた「する」スポーツの推進

他分野と連携することで、相乗効果による、「する」スポーツの推進を図ります。



## 2 「みる」スポーツの推進

### (1) 「みる」スポーツの機会創出

#### 【現状と課題】

スポーツを「みる」ことでコミュニケーションを促進し、生活の質を向上させる役割を果たすほか、スポーツを「みる」ことで、スポーツを「する」きっかけとなることから、「みる」スポーツの機会の創出が求められます。

● 「みる」スポーツの意味合い

話題として必要

24.7%

生活を豊かにするため必要

23.0%

#### 【目標】

「みる」スポーツの機会創出につながる魅力ある大会やイベントの開催を目指します。

#### 【具体的取組】

##### ① スポーツ大会やイベントの開催

スポーツ大会やスポーツイベントを開催することにより、スポーツをみる機会を創出します。



## (2) 観戦者のニーズに対応できるような環境整備

### 【現状と課題】

市民の多くがテレビ等を通して、スポーツ観戦を楽しんでいます。グラウンドや体育館などでの観戦者を増やし、臨場感を味わったり、観戦者間の交流などスポーツの魅力を伝えることも必要です。

●健全者のプロスポーツ観戦方法	テレビ等	試合会場のみ	どちらもあり
	<u>68.1%</u>	<u>4.6%</u>	<u>24.0%</u>
●障がい者のプロスポーツ観戦方法	テレビ等	試合会場のみ	どちらもあり
	<u>78.7%</u>	<u>3.5%</u>	<u>16.3%</u>

### 【目標】

誰もがスポーツを観戦したくなる環境の構築を目指します。

### 【具体的取組】

#### ② スポーツ観戦しやすい環境の整備

障がいの有無にかかわらず、誰もがスポーツ観戦しやすい環境づくりを行うことで、みるスポーツの推進を図ります。

## (3) 「みる」スポーツの情報発信

### 【現状と課題】

県内でのプロスポーツチームの活躍やSAGA2024国スポ・全障スポ大会の開催によって、多種多様なスポーツに対し、市民の関心は高まっています。

このため、市内で開催される「みる」スポーツに関わる情報を集約し、年代や障がいの有無に応じた、全ての市民に素早く効果的に届ける手段の工夫が必要となっています。

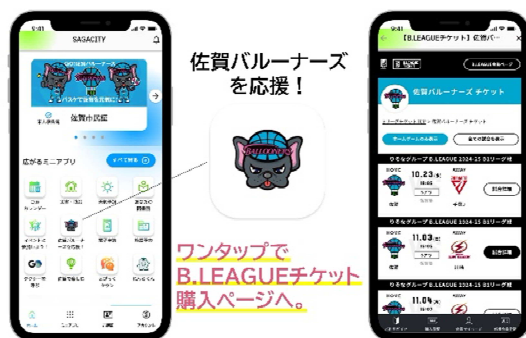
### 【目標】

「みる」スポーツの機会充実につながる効果的な情報発信の強化を目指します。

**【具体的取組】**

**③ 「みる」スポーツの情報発信の強化**

市民がスポーツを「みる」機会を増やすため、DX化やSNSの活用等、市内で開催されるスポーツ大会や市民が参加できるスポーツ大会等の情報提供を進め、スポーツ観戦の機会を創出します。



**(4) 「みる」スポーツによる地域振興**

**【現状と課題】**

スポーツのチカラ(価値)を活用したまちづくりが注目されています。スポーツをみる人を増やし、まちを元気にする取組が求められています。

●プロスポーツの観戦方法	テレビ等 <u>68.1%</u>	試合会場のみ <u>4.6%</u>	どちらもした <u>24.0%</u>
●トップレベルのチームや選手との交流	ある <u>12.9%</u>	ない <u>87.1%</u>	
●トップチーム等の合宿・キャンプ誘致の是非	積極的に誘致すべき <u>64.6%</u>	誘致する必要はない <u>2.7%</u>	
●キャンプを積極的に誘致すべき理由	地域が活性化する <u>69.2%</u>	スポーツに関心を持つ人が増える <u>46.3%</u>	

**【目標】**

スポーツ大会やイベント、合宿の誘致やプロスポーツチームと連携することで、スポーツへの関心を喚起し、交流人口の拡大を図るなど、まちの賑わいづくりへの活用を目指します。

### 【具体的取組】

#### ④ スポーツ大会・合宿の積極的誘致

国内外からのスポーツ大会・合宿等を誘致し、スポーツを「みる」機会を創出し、多くの人を呼び込み、交流人口の拡大を図ります。

#### ⑤ プロスポーツチームやスポーツ大会・イベントを活用したまちの賑わいづくり

プロスポーツチームとの連携を強化する等、スポーツが持つ経済的価値や社会的価値を地域振興につなげる取組を行います。



### (5) 相乗効果による「みる」スポーツの推進

#### 【現状と課題】

スポーツは、健康、教育、まちの賑わいなど、多分野にポジティブな影響をもたらします。そうした他の分野と連携し、スポーツを推進するという視点も重要です。

#### 【目標】

プロスポーツチームや他分野・他団体と連携し、「みる」スポーツの魅力を広め、市民のスポーツへの関心を高めることを目指します。

### 【具体的取組】

#### ⑥ プロスポーツチームと連携した「みる」スポーツの推進

影響力の大きいプロスポーツチームと連携し、効果的な情報発信を行う等、市民にスポーツの魅力を伝える取組を行います。

## ⑦ 他分野との連携を通じた「みる」スポーツの推進

他分野と連携することで、相乗効果による、「みる」スポーツの推進を図ります。



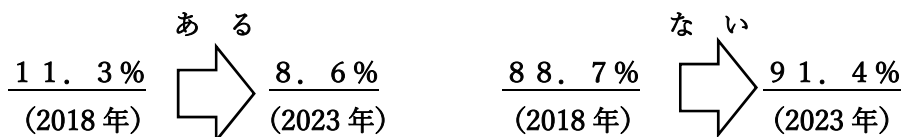
## 3 「ささえる」スポーツの推進

### (1) スポーツを「ささえる」人材の確保

#### 【現状と課題】

スポーツを「ささえる」活動の1つに「スポーツボランティア」があります。スポーツボランティアは、スポーツの円滑な運営に欠かせない存在ですが、登録者数は減少傾向にあります。また、参加者の中でも自発的に参加する人は少数です。このため、「ささえる」人材を増やす取組が必要です。

#### ●スポーツボランティアへの参加の有無



#### ●スポーツボランティアへの参加の理由

##### (参加した理由)

スポーツ関係団体から頼まれて  
32.6%

地域や町内会に頼まれて  
27.9%

自ら応募した  
18.6%

(参加しなかった理由)

知らない、参加方法がよくわからない

28.2%

忙しい

16.8%

興味・関心がない

11.2%

●今後のスポーツボランティア  
への参加意識

(ぜひ・できれば)行いたい

25.0%

まったく行いたいと思わない

16.4%

**【目標】**

地域スポーツを支える人材の育成と継続につながる支援体制の充実を目指します。具体的には、地域スポーツの指導者の養成・育成を進め、スポーツボランティアを養成し、登録を推進します。また、少年スポーツの指導者資格取得を支援し、指導者や保護者への啓発活動を通じて、子どものスポーツの発展を促進します。さらに、プロスポーツの知識や技術を活用し、地域スポーツ・少年スポーツの指導者の指導力向上を目指します。

**【具体的取組】**

**① 地域スポーツに携わる人材の育成**

市民にとって、身近な場所（地域）での運動・スポーツ活動を支援するため、地域における指導者や各地域においてスポーツイベント・教室の企画・運営を行う人材の発掘と育成に努めます。

**② スポーツボランティアの養成**

より多くのボランティアを養成するため、大学・企業・NPO等と連携し、スポーツボランティアとして「ささえる」スポーツへの関わりを推進し、定着させ、その活動を支援します。

**③ スポーツボランティアの登録推進**

市民にスポーツボランティア登録の推進を行い、「ささえる」スポーツと「する」スポーツ両者の参加促進が相乗的に得られる好循環を創出します。

**④ 少年スポーツ指導者の資格取得への支援**

「少年スポーツのあり方についての取組方針」に基づき、子どもたちの発達段階に応じた適切な指導が行われるよう、指導者に対し、指導者資格取得への支援等を行います。

**⑤ 少年スポーツ指導者の資質向上及び保護者への啓発**

少年期のスポーツ実施では、生涯にわたってスポーツに親しむことができる基礎を培うことが必要であり、子どものスポーツ実施に大きな影響を持つ指導者と保護者に対して講習会等を実施します。

## ⑥ プロスポーツに関わる指導者等の持つ知識や技術の活用

プロスポーツチームの指導者等がもつ知識や技術を活用し、市内のスポーツ指導者の指導力向上につなげるための機会を創出します。



## (2) 「ささえる」スポーツの情報発信

### 【現状と課題】

「スポーツボランティア」を知らない、関心がない層に対する働きかけが必要です。

●スポーツボランティアへの  
参加しなかった理由

知らない、参加方法がよくわからない

28.2%

忙しい

16.8%

興味・関心がない

11.2%

### 【目標】

「ささえる」スポーツの機会充実につながる効果的な情報発信の強化を目指します。

### 【具体的取組】

## ⑦ 「ささえる」スポーツの情報発信の強化

スポーツボランティア等の情報や地域のスポーツクラブ等の情報をホームページ等に掲載し、積極的な情報発信を行います。

### (3) 「ささえる」スポーツによる地域振興

#### 【現状と課題】

スポーツのチカラ（価値）を活用したまちづくりが注目されています。スポーツをささえる人を増やし、まちを元気にする取組が求められています。

#### 【目標】

本市で開催する各種競技大会等を支援し、各種大会等の開催を促進することで交流人口の拡大を図り、地域振興やまちの賑わいづくりを目指します。

#### 【具体的取組】

##### ⑧ 大会（パラスポーツも含む）の開催支援

各競技団体や関係機関、組織等が本市で開催する競技大会を支援するとともに、運営をささえるボランティアの確保を支援します。



### (4) 相乗効果による「ささえる」スポーツの推進

#### 【現状と課題】

スポーツは、健康、教育、まちの賑わいなど、多分野にポジティブな影響をもたらします。そうした他の分野と連携し、スポーツを推進するという視点も重要です。

●今後のスポーツボランティアへの参加意識

(ぜひ・できれば) 行いたい

25.0%

まったく行いたいと思わない

16.4%

#### 【目標】

プロスポーツチームの発信力等を活用し、効果的な情報発信を行うとともに、他分野や企業のCSR活動と連携し、スポーツボランティアへ関わる意識を高めることにつなげます。また、部活動の地域展開に伴い、受け皿となるクラブや団体との協力を促進し、円滑な展開を支援することで、地域に根ざしたスポーツ環境の整備を目指します。

## 【具体的取組】

### ⑨ プロスポーツチームと連携した「ささえる」スポーツの推進

影響力の大きいプロスポーツチームと連携し、効果的な情報発信を行う等、スポーツボランティア等の「ささえる」スポーツの魅力を伝える取組を行います。

### ⑩ 他分野との連携を通じた「ささえる」スポーツの推進

他分野と連携することで、相乗効果による、「ささえる」スポーツの推進を図ります。

### ⑪ 部活動の地域展開の受け皿となるクラブとの連携

部活動の地域展開に伴い受け皿となる可能性がある団体との連携を図り、受け皿づくりを推進します。



# 資料編

---

佐賀市民のスポーツに対する意識と活動の実態に関する調査集計結果

# 佐賀市民のスポーツに対する意識と活動の実態に関する調査 集計結果

## I. 調査の目的

佐賀市スポーツ推進計画を策定するにあたり、市民の運動やスポーツに対する意識やそれらの実施状況を把握することを目的とする。

## II. 調査概要

### 1. 調査対象者

18歳以上の男女 2,000人（年代別、性別、居住地域別）

### 2. 調査時期

令和5年12月28日～令和6年1月19日

### 3. 調査方法

佐賀市住民基本台帳登録者のうち18歳以上のものを市町村合併前の市町村単位に区分し、その人口比率ごとに対象者数を算出。その対象者数に、年齢区分ごとの比率を乗じて各地区の男女別、年代別の対象者を算出した。そのうえで、住民基本台帳から対象者を無作為抽出し、郵送により調査票を送付。同封の返信用封筒により調査票の回収を行った。

### 4. 回収状況

送付数	2,000部		
回収数	573部（調査票：443部、Web：130部）	回収率	28.7%
有効回収数	550部（調査票：420部、Web：130部）	有効回収率	27.5%

### 5. 調査結果の見方

アンケート質問項目については、原則として、本市が平成30年に実施した調査（以下、「前回調査」）と同じものを設定し結果を比較できるようにした。その他本市独自の項目を追加している。

グラフや表の数値は、全体か男女別の回答者数を100とした百分率（%）で表示している。

また、複数回答の場合に記載している、表中のM.T.（Multiple Totalの略）とは、回答数の合計を対象者数で割った比率であり、比率の合計が100%を超える場合がある。

グラフや表の全体集計には性別不明の回答も含まれるため、男女別集計の合計と一致しない場合がある。また、年齢別集計で「10代」となっているのは、調査対象となる18・19歳のみの集計となっている。なお、集計は小数点以下第2位を四捨五入しているため、回答比率の合計は必ずしも100%にならない場合がある。

### Ⅲ. 調査結果の概要

#### 1. 回答者の基本的属性について

男女比については、「男性」46.7%、「女性」53.3%で女性の回答が多い（図1）。年齢では、全体で「70歳以上」が23.8%と最も多く、次に「60代」22.4%と続いており、60歳以上が5割近くを占めている（図2）。

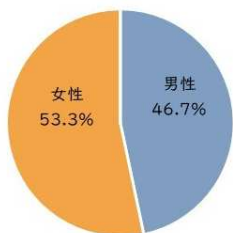


図1. 回答者の性別

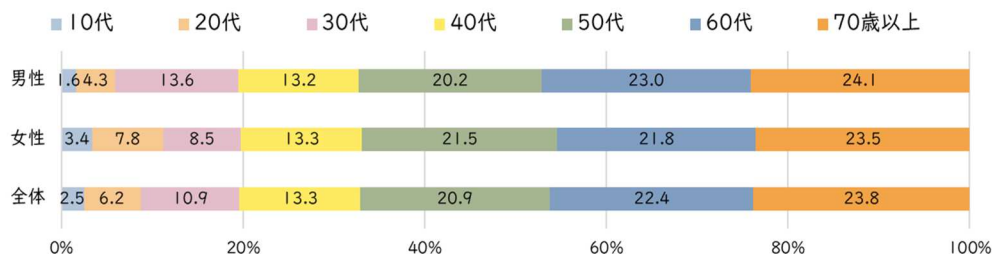


図2. 回答者の年代

居住地については、全体で「旧佐賀市」が男女ともに7割を超えているのに対し、「富士町」1.6%、「三瀬村」0.4%と少ない値を示しているが、概ね佐賀市における旧市町別の人口構成比と同じ比率となっている（図3）。

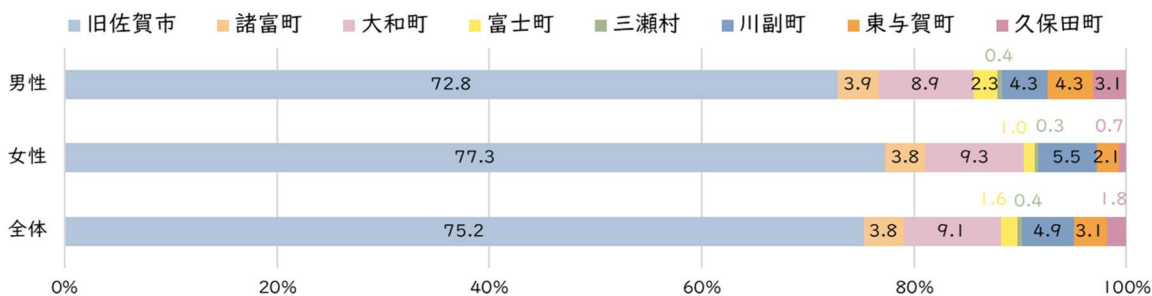


図3. 回答者の居住地

職業は、全体で「お勤め（フルタイム）」が最も多く約3割、次いで「お勤め（パート・アルバイト）」が約2割となっている。前回調査同様に両者で約半数を超える結果となったが、前回調査との比較では、前者で約1割減、後者で1割増となっている（図4）。

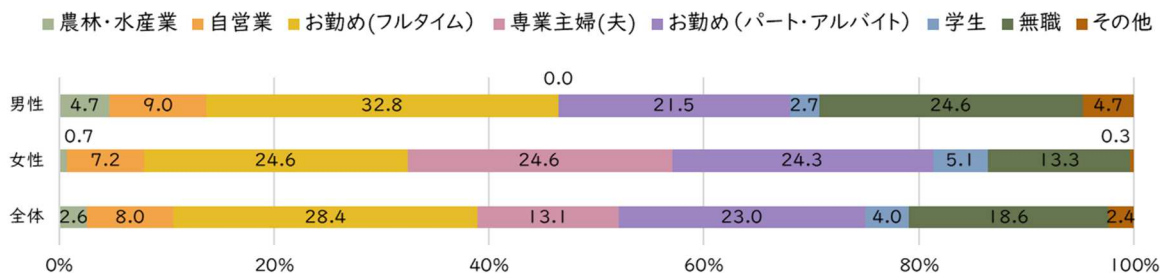


図4. 回答者の職業

#### 2. 「する」スポーツについて

普段の運動不足感についてたずねたところ、全体で約8割が「感じる（大いに+ある程度）」と回答している。特に、「大いに感じる」を見ると、男性が約3割、女性が約5割と、女性の方がより顕著である傾向が示された（図5）。

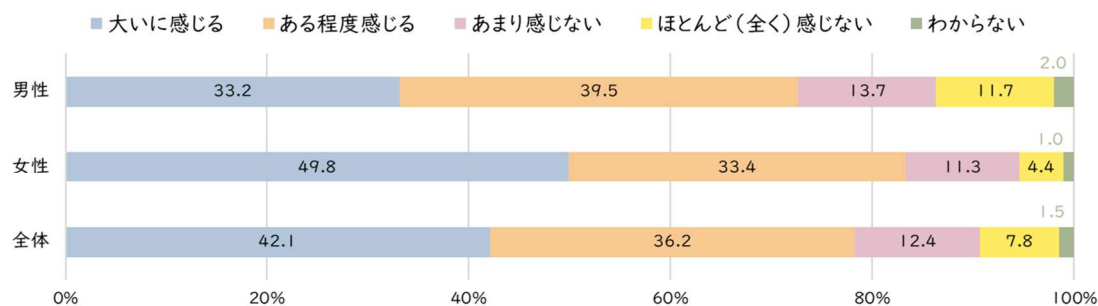


図5. 運動不足を感じているか

日常的（週に1日以上（週に3日以上+週に1~2日））に運動やスポーツを行っている人の割合は、全体で49.5%を示した。これは、41.7%を示した前回調査を7.8%上回る結果となった（図6）。同割合を「性別」で見ると、男性は52.1%であり、前回調査の47.0%より5.1%の増。女性は47.1%を示し、前回調査の37.2%から約1割増と大きく上回る値を示したことから、女性の実施率が顕著に上昇している。

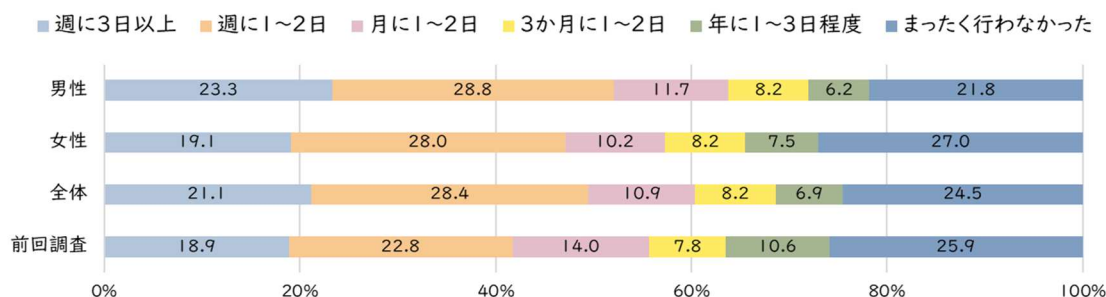


図6. 運動・スポーツの実施頻度（性別）

「年代別」で見ると、70歳以上の割合が61.8%と最も高く、20代の52.9%が続いている。一方、30代の35.0%が最も低い値を示し、次いで40代の43.8%となっており、30代から50代を中心とした「働き盛り世代」の実施率の低さが明らかになった（図7）。なお、実施率の全体的増加傾向が示された中で唯一60代の48.8%が前回調査の51.0%を下回る値となっている。

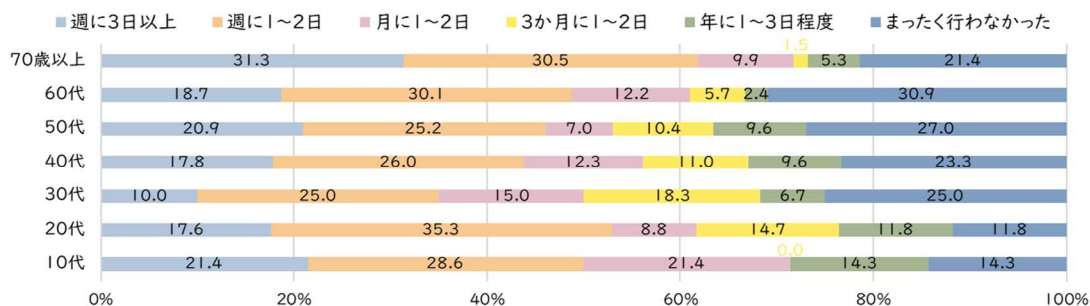


図7. 運動・スポーツの実施頻度（年代別）

運動やスポーツの実施日（曜日）については、土・日が多く、特に男性はその傾向が高くなっている（図8）。

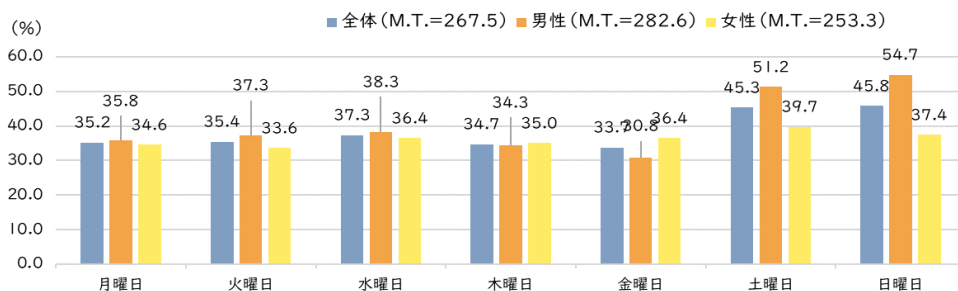


図8. 運動・スポーツの実施日

運動やスポーツの実施理由は、全体で高い割合を占めた項目は、順に「健康のため」（57.6%）、「体力増進・維持」（37.3%）、「楽しみ・気晴らし」（29.2%）となっている（図9）。

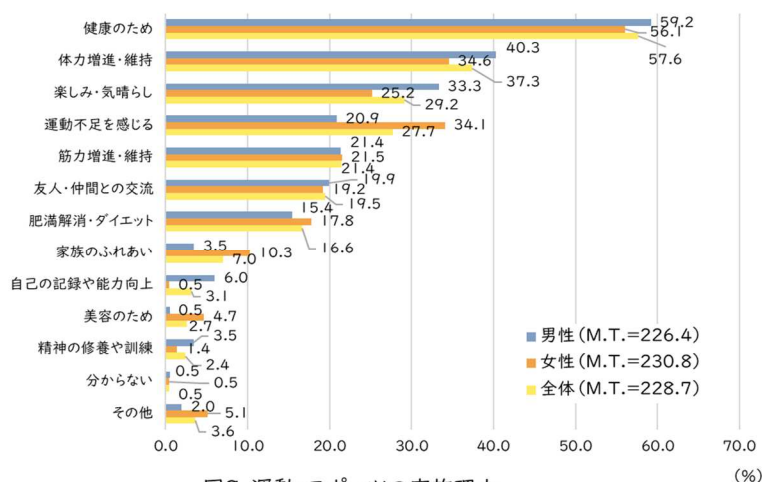


図9. 運動・スポーツの実施理由

逆に、「週1回以上行っていない」人の理由については、全体で「仕事や家事が忙しい」（47.8%）が最も高い割合を示し、次に「生活や仕事で体を動かしている」（21.7%）、「面倒くさい」（18.0%）の順になっている。男性より女性の割合が高い傾向になっている（図10）。

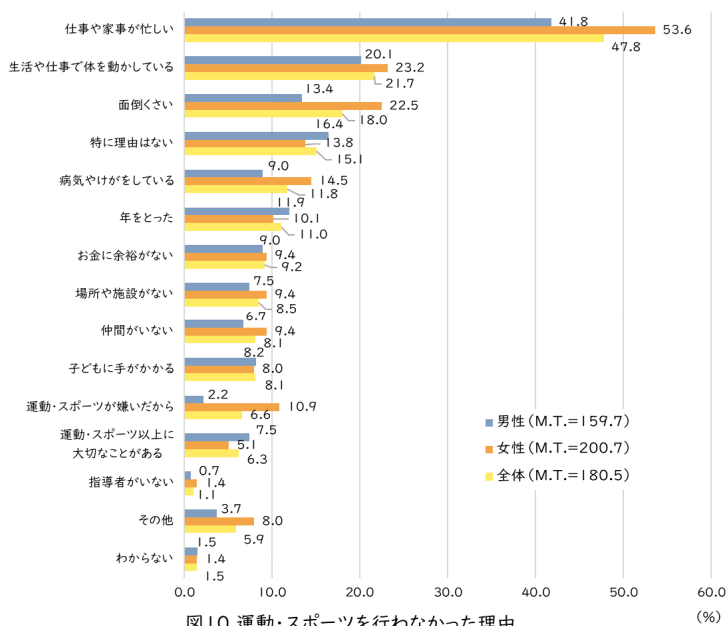
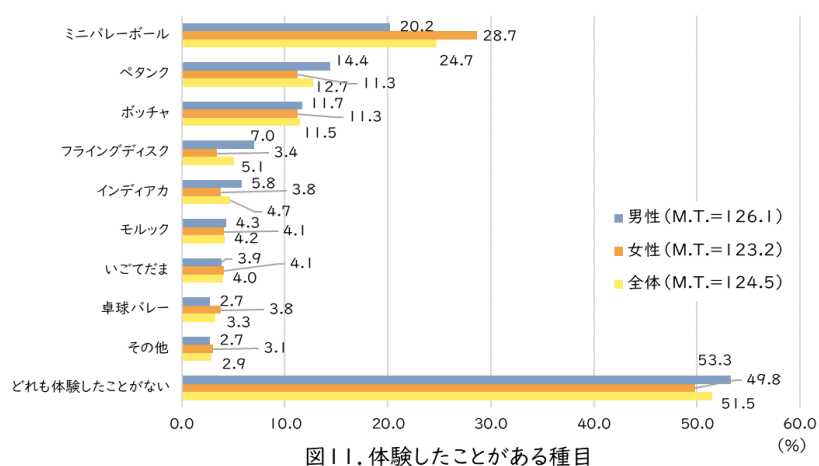


図10. 運動・スポーツを行わなかった理由

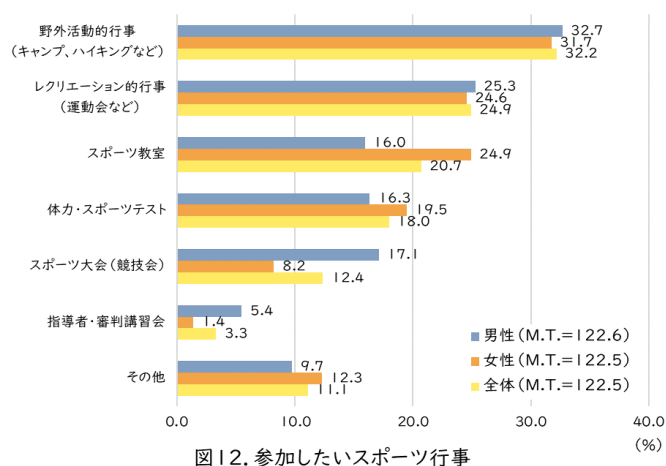
過去1年間に行った運動・スポーツについては、下記の表の結果が得られた。前回調査と大きな変化はないが、「ウォーキング」の割合が男女ともに約1割高くなり、「トレーニング」も男女とも割合が高くなっている。その他では、「サイクリング」、「水泳」、「テニス・ソフトテニス」などが、多い傾向にある。

全体	男性	(前回調査)	女性	(前回調査)
1位 ウォーキング(含、散歩・ぶらぶら歩き)(67.7)	ウォーキング(含、散歩・ぶらぶら歩き)(61.7)	ウォーキング(含、散歩)(53.4)	ウォーキング(含、散歩・ぶらぶら歩き)(73.4)	ウォーキング(含、散歩)(60.5)
2位 体操(ラジオ体操・美容体操)(18.8)	ランニング(ジョギング・マラソン・駅伝)(19.4)	ジョギング(18.6)	体操(ラジオ体操・美容体操)(26.2)	ラジオ体操(21.7)
3位 トレーニング(筋力・トレッドミル等)(18.3)	トレーニング(筋力・トレッドミル等)(18.4)	ゴルフ(17.0)	トレーニング(筋力・トレッドミル等)(18.2)	ストレッチ(18.6)
4位 ランニング(ジョギング・マラソン・駅伝)(12.8)	ゴルフ(コース)(16.9)	トレーニング・ストレッチ(11.9)	エアロビクス・ヨガ・ピラティス(11.7)	トレーニング(12.8)
5位 ゴルフ(コース)(9.6)	体操(ラジオ体操・美容体操)(10.9)	サイクリング・ラジオ体操(10.7)	階段昇降(8.9)	ヨガ・ピラティス(10.9)

ニュースポーツ及び障がい者スポーツの実施経験種目についてみると、「ミニバレーボール」の割合が高くなっている。前回調査と同様に、「どれも体験したことがない」という回答が最も多い(図11)。



今後、参加したいスポーツ行事について、全体では「野外活動的行事」、「レクリエーション的行事」の順に高い割合となっているが、それ以外で見ると、女性では「スポーツ教室」、男性では「スポーツ大会」の割合が高く、性別により参加希望の内容に違いが見受けられる(図12)。



### 3. 「みる」スポーツについて

スポーツ観戦（テレビ観戦含む）の平均時間は、男性のほうが観戦時間は長い結果となった。特に、「週に1時間以上」の値が女性より男性の方が約2倍高い（図13）。

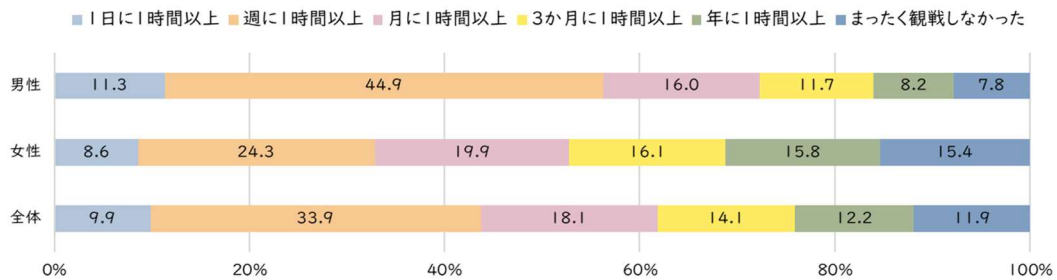


図13. スポーツ観戦の有無

過去1年間のプロスポーツ観戦方法について見てみると、ほとんどが観戦していることが分かった。そのうち、『「試合会場で直接観戦した」のみ』は僅かであるが、「どちらもした」を含めると約3割が直接観戦を経験している（図14）。

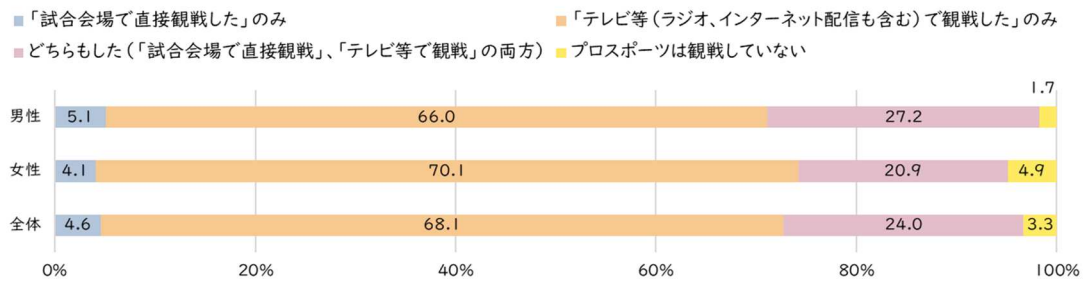


図14. プロスポーツの観戦方法

「みるスポーツ」の意味合いとしては、全体で「話題として必要」（24.7%）、「生活を豊かにするために必要」（23.0%）の順に割合が高く、男性で「日常生活の一部として欠かせない」が高い値を示していることから、生活の中でのコミュニケーションの一部となっている様子が伺える（図15）。

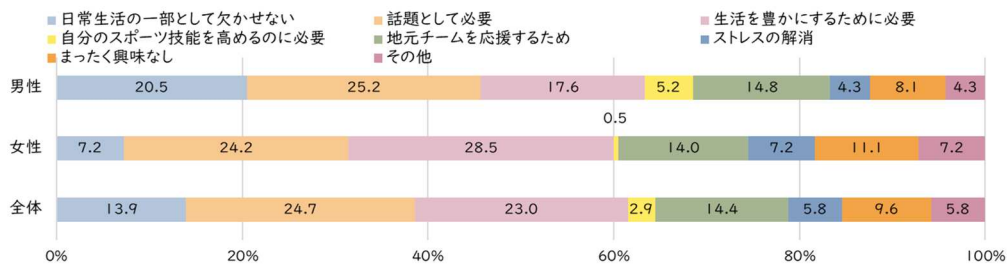


図15. 「みるスポーツ」の意味合い

プロ・代表チーム等、トップレベルのチームや選手との交流について、「ある」と回答した割合は全体で12.9%という結果である（図16）。その交流内容については、「その他」を除いて、全体では「選手などによる講演会」（26.8%）が最も高く、性別では、男性で「競技の教室」、女性では「地域イベントへのゲスト出演」がそれぞれ最高値を示している（図17）。この両者の差は、交流した理由からも見て取れる。つまり、「選手と関わりたい」は、ほぼ同等の割合だが、男性は「指導法の参考にしたい」という理由も同程度の値を示しており、女性との違いが見て取れる（図18）。

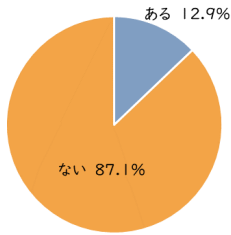


図16. トップレベルのチームや選手との交流

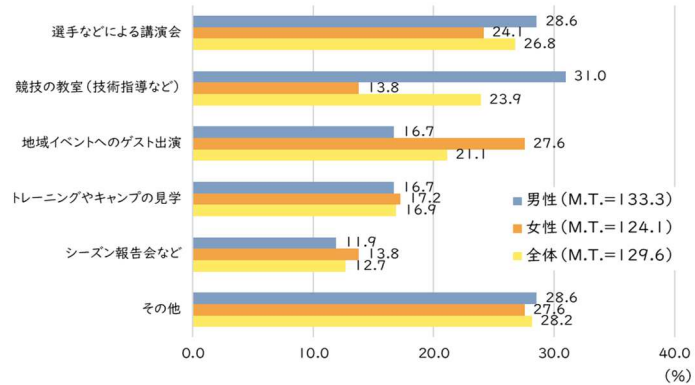


図17. 交流内容

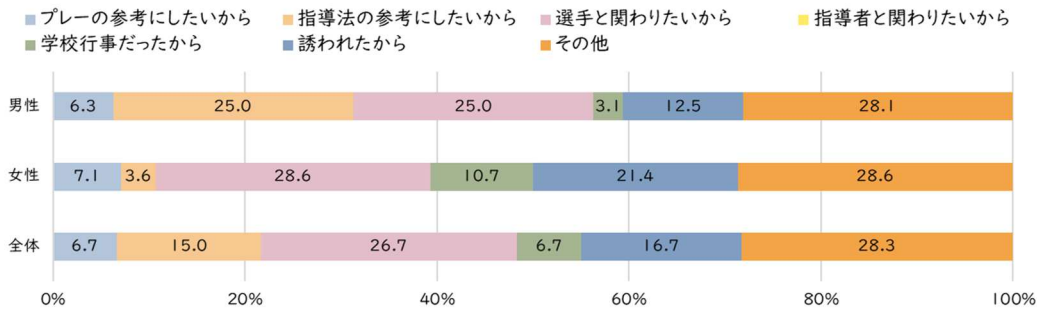


図18. 交流した理由

スポーツの合宿・キャンプ誘致については、「積極的に誘致すべき」が全体で6割を超えている(図19)。その主な理由として、「地域が活性化する」、「スポーツに関心を持つ人が増える」、「経済効果が見込まれる」の順で高い割合となっており、性別比較でも大きな差はみられなかった(図20)。なお、「誘致する必要はない」の主な理由としては、「興味がないから」「市民の施設利用が制限されるから」という回答が上位を占めている(図21)。

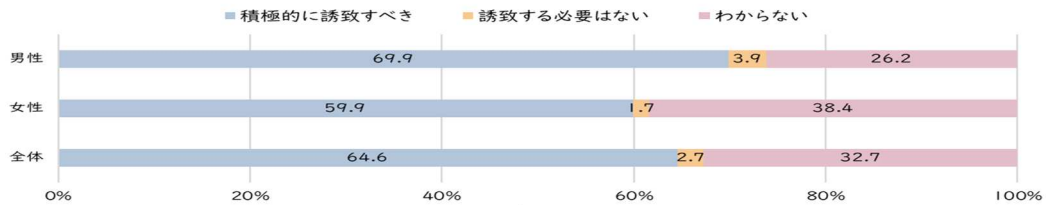


図19. キャンプ誘致の是非

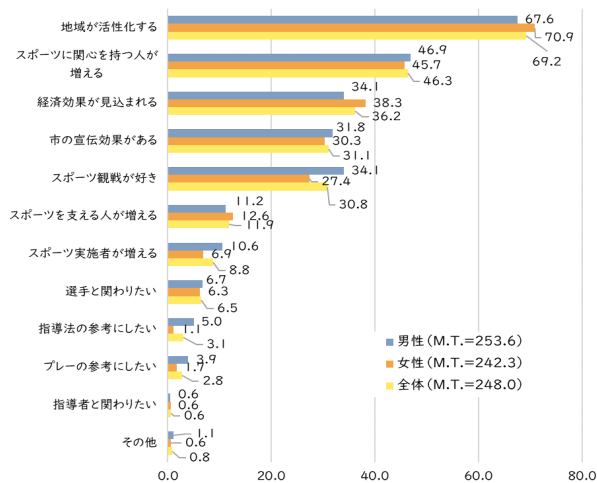


図20. キャンプを積極的に誘致すべき理由

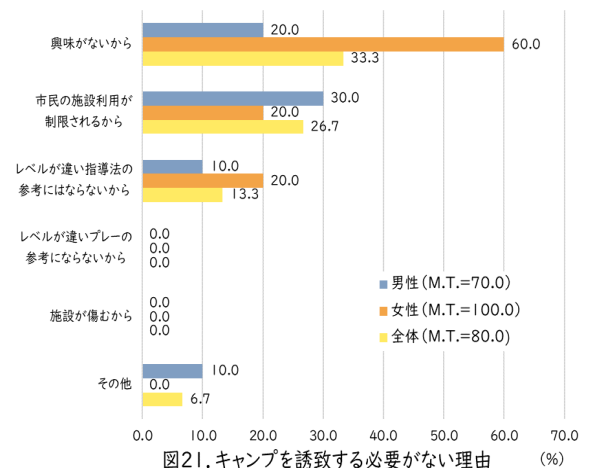


図21. キャンプを誘致する必要がない理由

#### 4. 「支える」スポーツについて

本市スポーツボランティア登録制度の認知度については、「知っている」が全体で14.8%であった（図22）。過去1年間におけるスポーツボランティア経験をみても、参加経験が「ある」人は全体で8.6%と前回調査の11.3%を下回る値となっている（図23）。

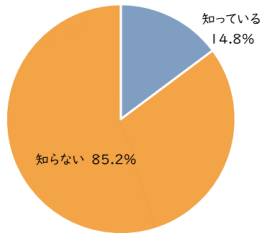


図22.スポーツボランティア登録制度の認知度

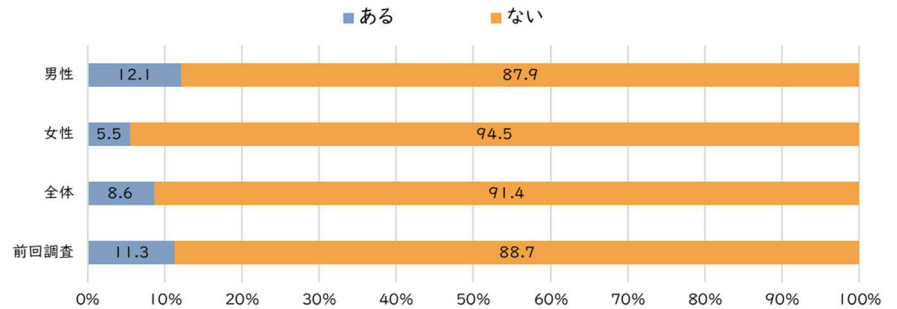


図23.スポーツボランティアへの参加の有無

参加の理由（経緯）としては、全体で「スポーツ関係団体から頼まれて」32.6%が最も高く、次に「地域や町内会で頼まれて参加した」27.9%となっており、依頼を受けての参加が上位を占めている（図24）。また、参加した人の感想は、「充実感があった」48.9%、「楽しかった」46.8%が高い割合を示している（図25）。

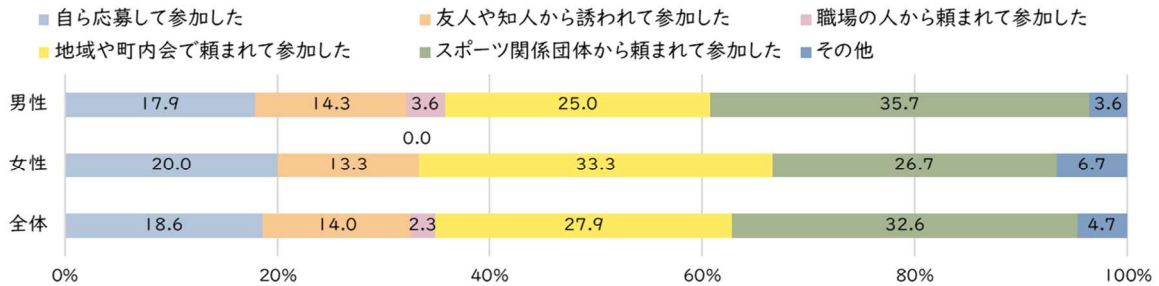


図24.スポーツボランティアへの参加の理由

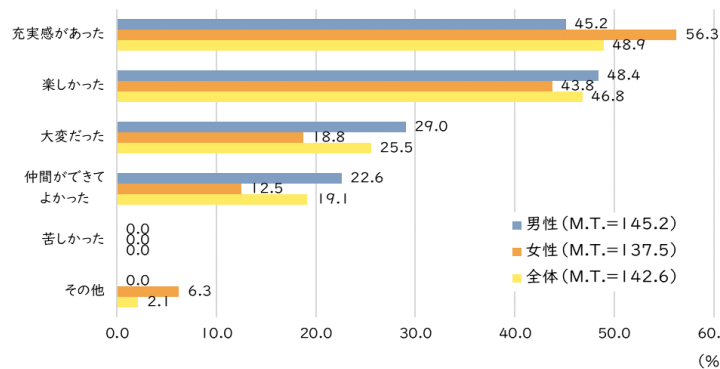


図25.スポーツボランティア参加の感想

スポーツボランティアに参加したことがない人を対象に、その理由を自由記述で訊ね、回答をカテゴリー化した結果、「知らない」が28.2%と最も高い割合を示し、次に「忙しい」16.8%、「興味・関心がない」11.2%、「機会がない」10.7%が上位を占めている（図26）。

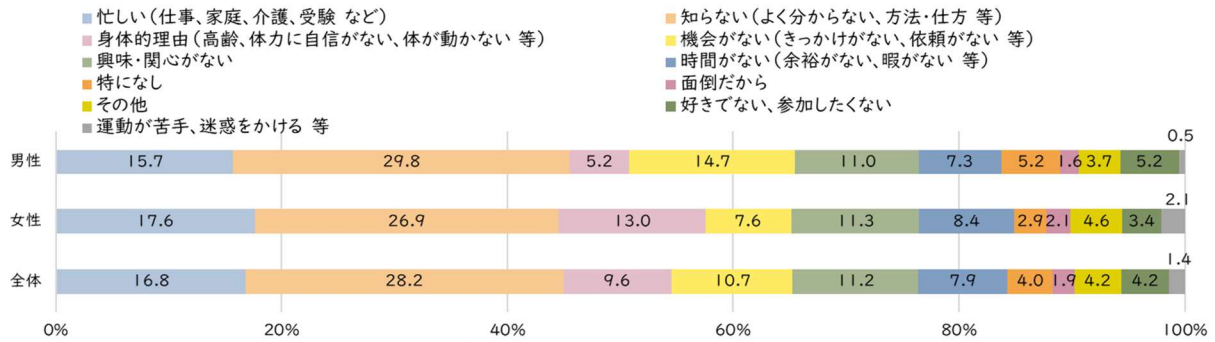


図26. スポーツボランティアへ参加したことがない理由

今後のスポーツボランティア活動への参加意識については、全体で「行きたい（是非行きたい+できれば行きたい）」と回答した人が 25.0%を占め、前回調査の 30.0%より 5.0%低下している。さらに、「行きたいと思わない（あまり行きたいとは思わない+まったく行きたいとは思わない）」が 49.6%と約 5 割を示している（図 27）、その理由については、自由記述で記入された回答をカテゴリー化した結果、全体で「身体的理由」、「興味・関心がない」、「時間がない」が上位を占めた（図 28）。

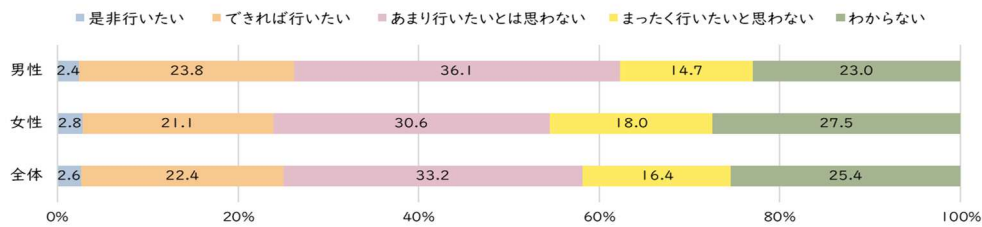


図27. スポーツボランティアへの参加意識

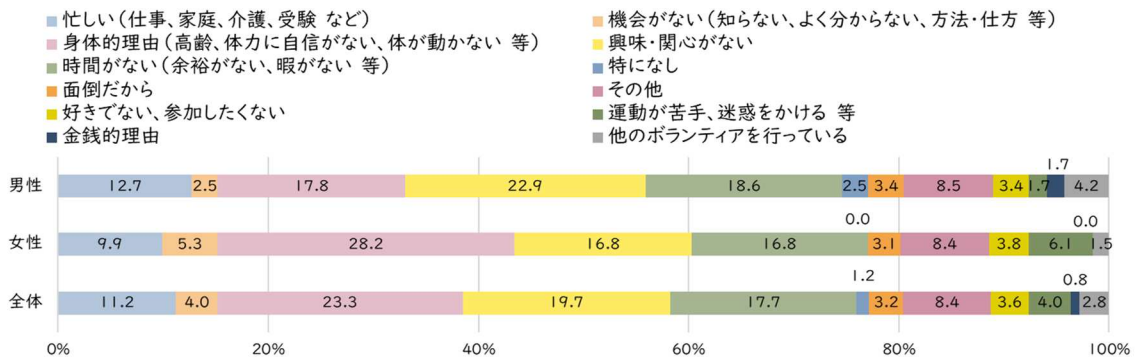


図28. スポーツボランティアを行わない理由

一方、「行きたい」と回答した人によるボランティアの内容については、「市民（地域）レベルの大会」が最も多く、次に「全国レベルの大会」、「プロスポーツの試合」の順となっている（図 29）。

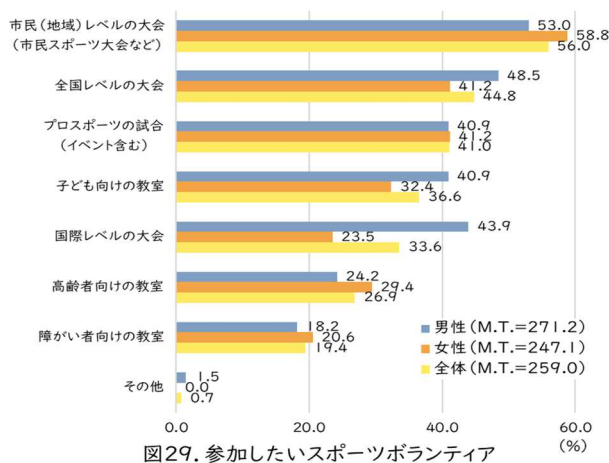


図29. 参加したいスポーツボランティア

## 5. 総合型地域スポーツクラブについて

総合型地域スポーツクラブの認知度について、「知っている」人は全体で 7.7%であり、前回調査の 6.5%を僅かに上回った。また、「初めて知った」は 81.0%であり、前回調査時とほぼ横ばいであった（図 30）。

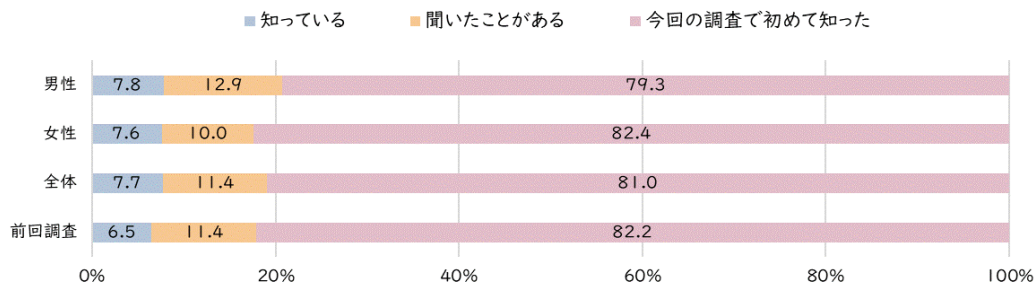


図30. 総合型地域スポーツクラブの認知度

加入意思については、全体で「（既に）加入している」が 1.5%、「加入したい」が 3.9%と低い（図 31）。そして、約 9 割を占める「加入していない」及び「加入したくない」人の理由については、「時間がない」が最も高い割合を占め、「きっかけがない」、「情報が無い」、「活動内容がわからない」の 3 項目が同等の割合で高い値を示した（図 32）。

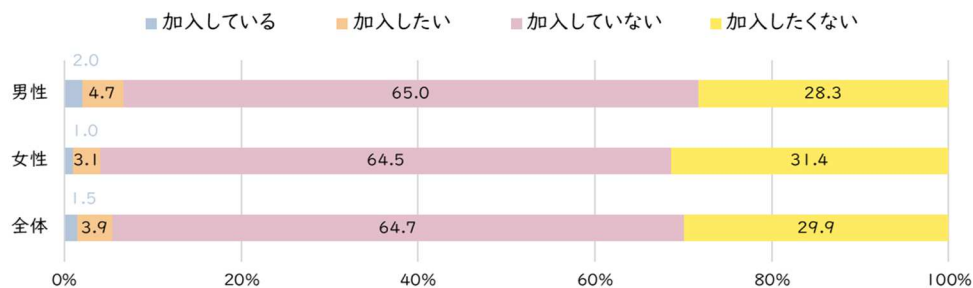


図31. 総合型地域スポーツクラブへの加入意思

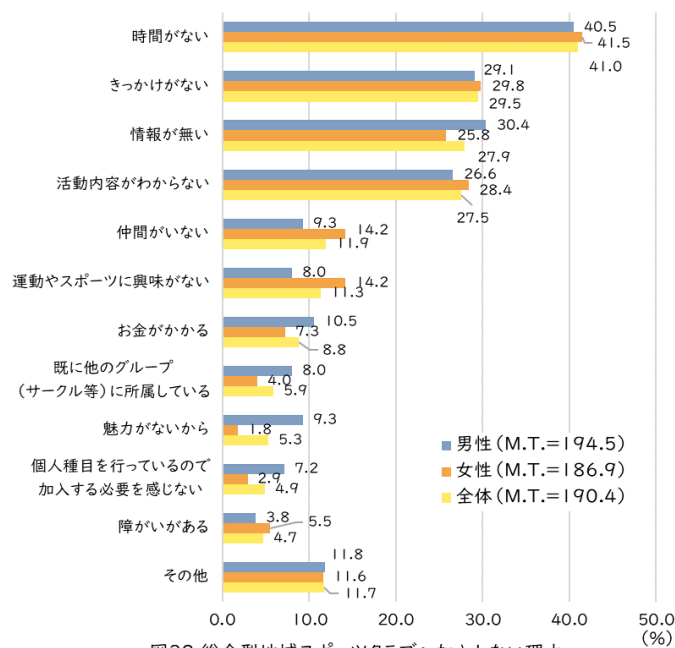


図32. 総合型地域スポーツクラブへ加入しない理由

## 6. 施設について

学校体育施設の利用については、「利用したことがある」もしくは「空き状況を確認したことがある」と回答した人の割合が全体で 25.5%となっているが、これは前回調査の約 3 割を下回っている。なお、学校体育施設利用の認知度については、「知っているが利用したことがない」(42.1%) に「利用したことがある」「空き状況を確認したことがある」を含めた 67.6%となっている(図 33)。

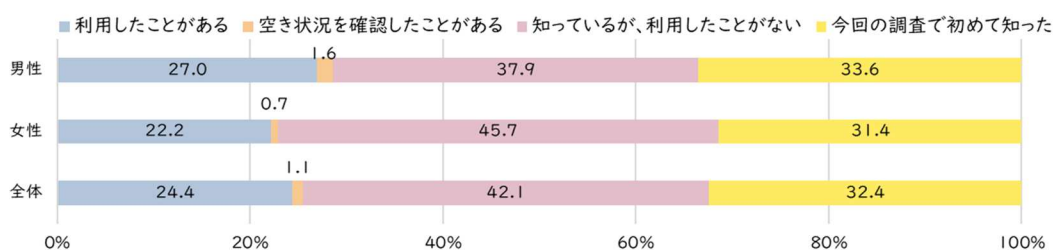


図33.学校体育施設の利用

日頃、運動・スポーツを実施する場所としては、全体では割合の高い順に、「自宅・友人宅」、「道路や空き地」、「公園・広場」となっている。男性は、「公園・広場」、女性は、「自宅・友人宅」と比較的自宅に近い場所を利用している(図 34)。

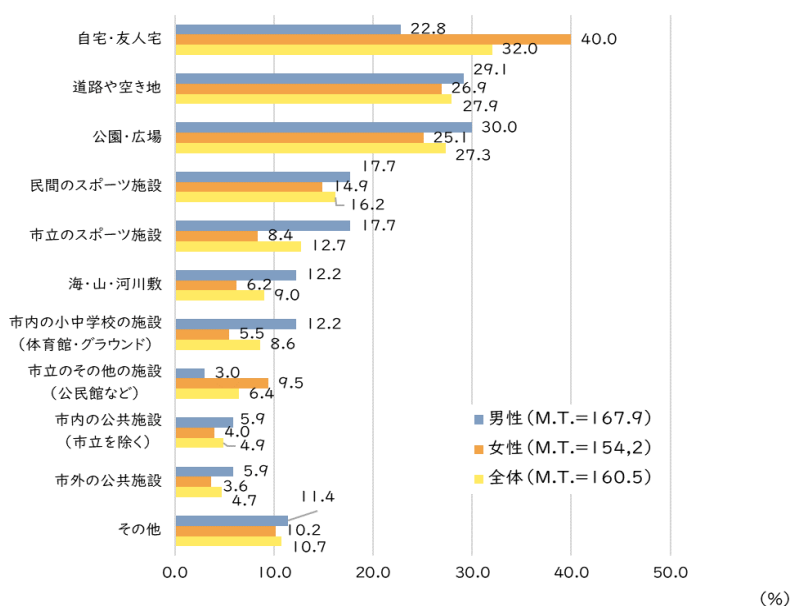


図34.運動・スポーツの実施場所

運動やスポーツを実施する時間帯については、全体では前回調査と同様に、18時以降の「夜間」と「深夜」が合わせて 26.4%と多くなっている。また、「午前(9時~12時)」も多くなっている(図 35)。

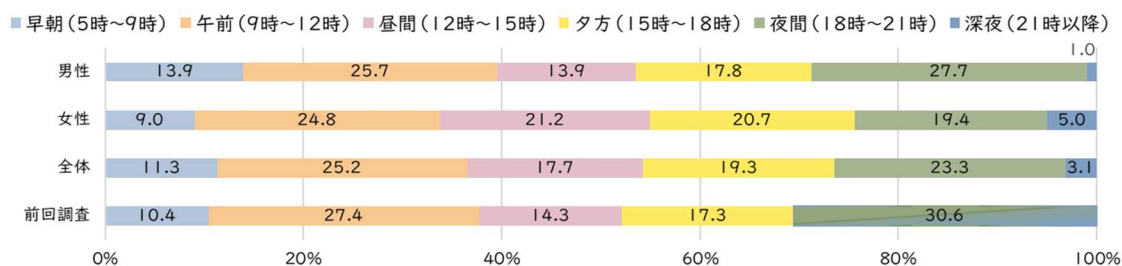


図35.運動・スポーツの実施時間帯(性別)

実施時間帯を年代別で見ると、10代以外の傾向として、年代が高くなれば「早朝」と「午前」の時間帯の割合が増え、逆に年代が低くなれば「夜間」以降の時間帯が増えている。また、10代から40代の半分以上は「夕方」以降に、50代以上の半分は「昼間」までに運動・スポーツを実施している（図36）。

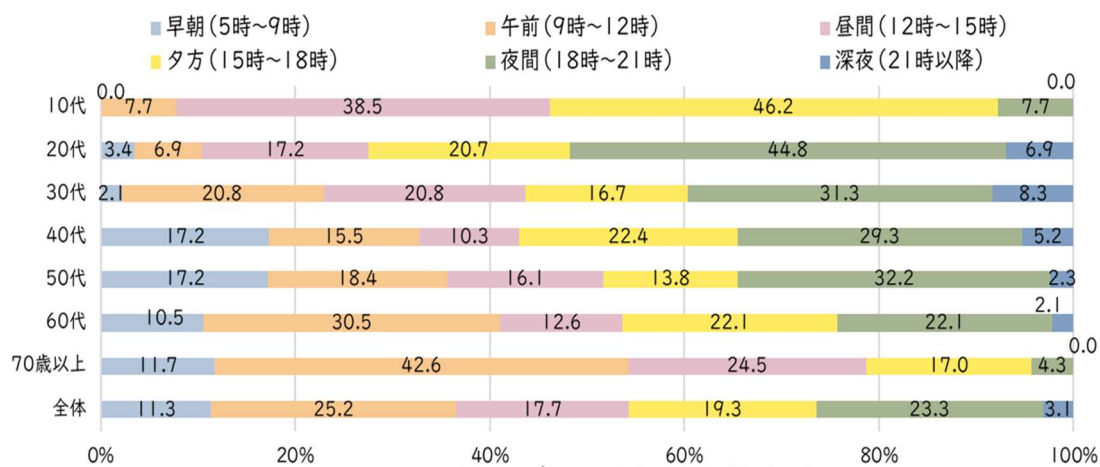


図36.運動・スポーツの実施時間帯 (年代別)

実施場所までの移動手段は、「自家用車、バイク」の割合が多く、約半分を占めている（図37）。

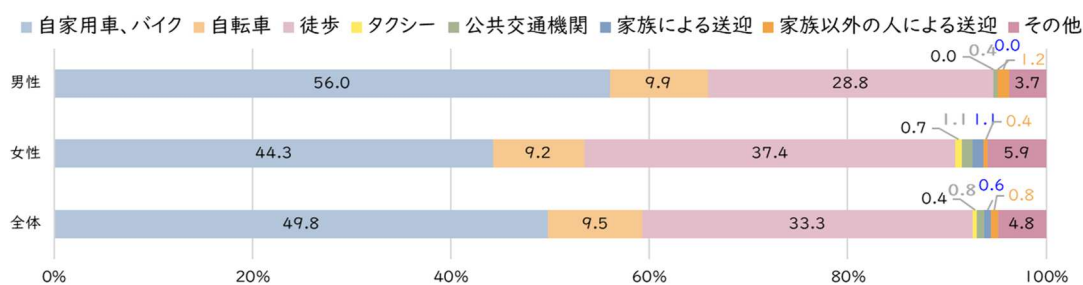


図37.運動・スポーツを実施する場所(施設)への移動手段

普段の運動やスポーツを実施している場所に対する満足度については、8割強の人が「満足（非常に満足+まあ満足）」と回答しており、「不満（やや不満+非常に不満）」の値を大きく上回っている（図38）。

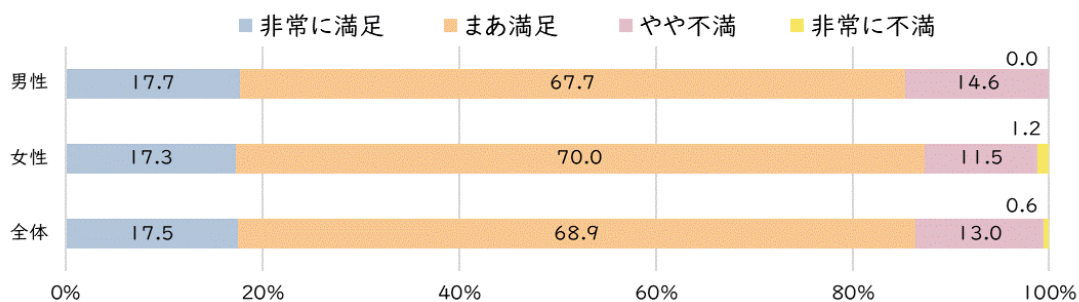


図38.運動・スポーツをする場所(施設)の満足度

普段、運動やスポーツを行っている場所（施設）への不満は、男女とも「家から遠い」という立地に対する回答が最も多く、男性でより高い割合となっている。女性は「施設・器具」や「利用料金」に対する不満が高い（図39）。

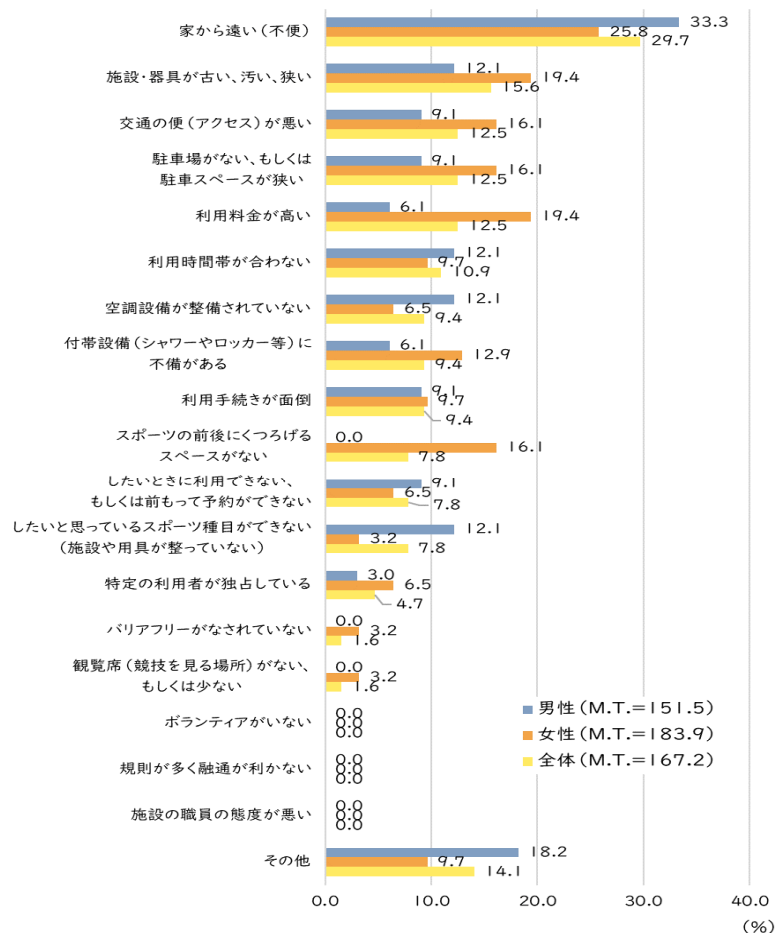


図39. 運動・スポーツをする場所(施設)への不満の理由

市立のスポーツ施設に対する要望としては、約半数が「特になし」としている。性別比較で見ると、男性は「施設の施設の新設」や「利用料金の引き下げ」への要望が高く、女性からは「運動やスポーツ教室の充実」と「利用料金の引き下げ」への要望が高い（図40）。

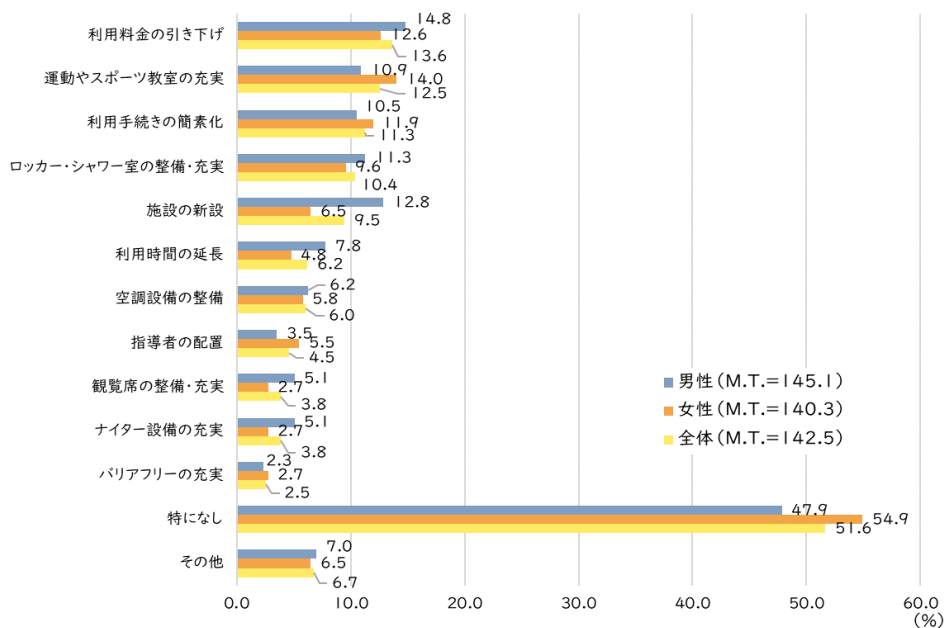


図40. 市立のスポーツ施設への要望

施設予約システムの利用については、「予約したことがある」と答えた人は全体で7.5%、「空き状況を確認したことがある」が3.5%となっており、前回調査とほぼ同率であった。「今回の調査で初めて知った」が27.9%、「使ったことがない」が61.1%で、前回調査と比較しても認知度が低い状況にある（図41）。

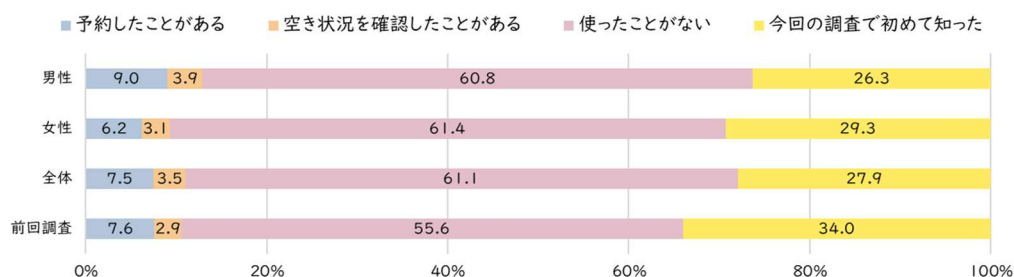


図41. 市立の運動・スポーツ施設予約システムの利用

## 7. その他

### (1) eスポーツについて

デジタル時代の進展とともに注目度が高まっている「eスポーツ（エレクトロニック・スポーツ）」については、全体で約半数が「知っている」と回答している（図42）。そして、全体の17.7%がeスポーツを『スポーツ』として捉えているが、男性の方が女性より3.8%高い（図43）。関心度も男性のほうが若干高く（図44）、関心の形態については、男女ともに『「みる」スポーツとして』が最も高くなっている（図45）。

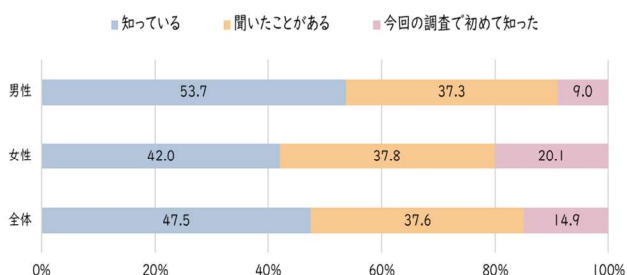


図42. eスポーツの認知度

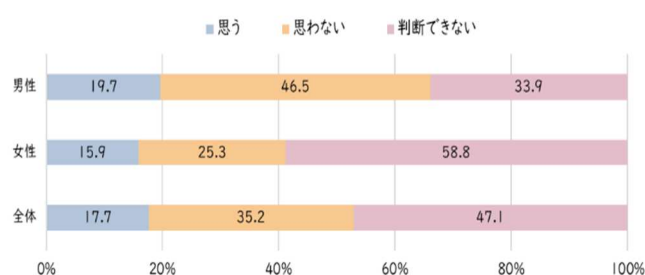


図43. eスポーツをスポーツとして捉えているか

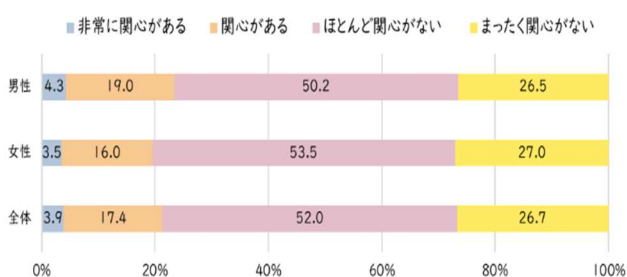


図44. eスポーツへの関心度

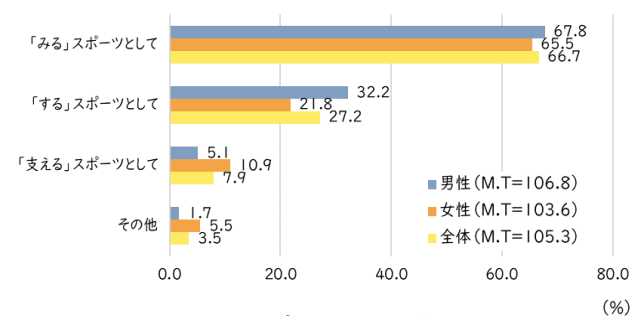


図45. eスポーツの関心の形態

## (2) 障がいのある人のスポーツについて

障がいのある人のスポーツについては、「関心がある（「非常に関心がある」を含む）」が全体で 50.3%であり、前回調査の 36.4%から大きく上昇している（図 46）。関心の形態については、男女ともに『「みる」スポーツとして』が最も高く、前回調査から継続した傾向となっている（図 47）。

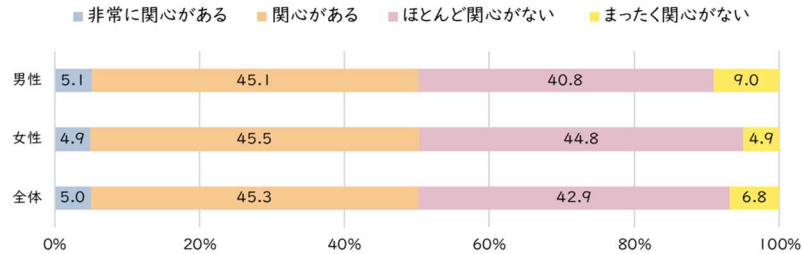


図46.障がい者スポーツへの関心度

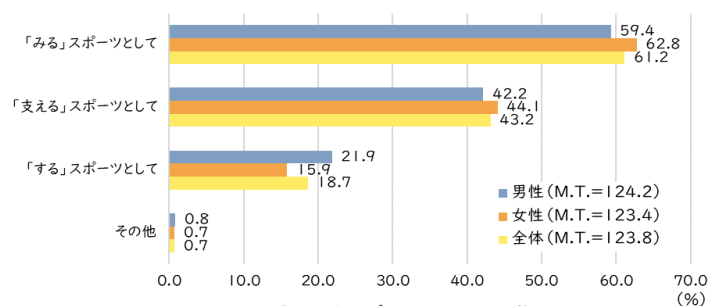


図47.障がい者スポーツの関心の形態

## (3) 市のスポーツに関する情報の収集について

市のスポーツに関する情報収集手段として最も高い割合を示したものは全体で「テレビ」が最も多く、次いで「市報」が多い値を示し、性別比較でも同じ順位となっている（図 48）。

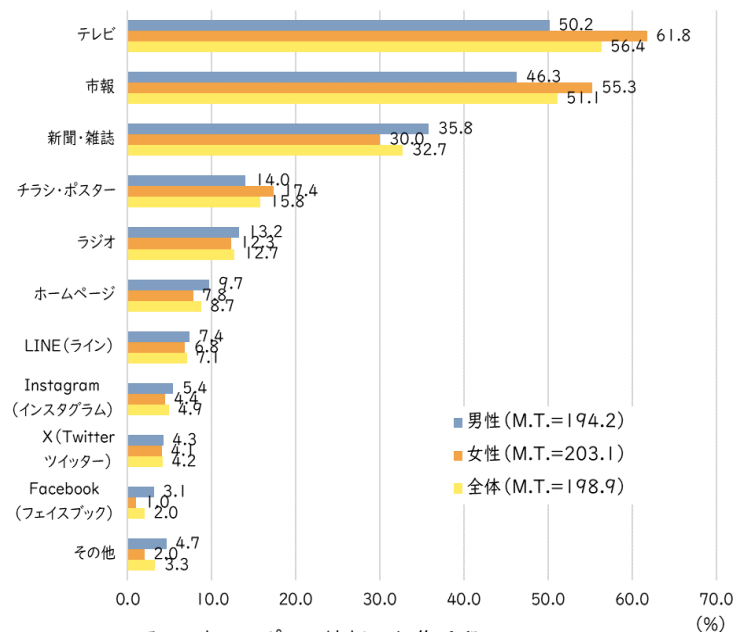


図48.市のスポーツ情報の収集手段

#### (4) スポーツ競技力向上のために重要なことについて

本市の選手・チームの競技力向上のために最も大事なことについてたずねたところ、最も選択が多かった項目は、全体と性別比較も同様に「ジュニアアスリート発掘・育成事業の充実」、次いで「指導者の質の向上」であった（図 49）。

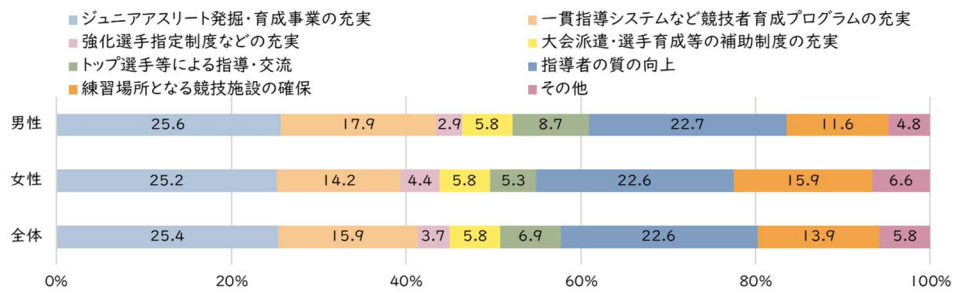


図49. 競技力向上のために最も大事なこと

#### (5) アーバンスポーツ実施に向けた整備取組について

オリンピックの正式種目にも採用され、子どもや若者に人気が高い「アーバンスポーツ」に対する本市の実施場所の整備については、約半数が「賛成」を示し「反対」は僅かである（図 50）。

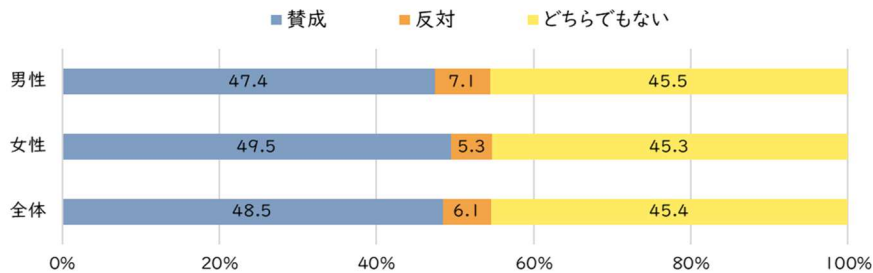


図50. アーバンスポーツ実施への取り組み

#### (6) 学校運動部活動地域移行へのあり方について

国の取組の一つである「学校部活動の地域移行」に関連して、本市の運動部活動の地域移行のあり方の理想についてたずねた結果、「専門的で丁寧な指導が受けられる」48.2%、「いろんな世代や年齢の人と一緒に活動ができる」32.5%、「やりたい種目が選択できる」29.6%が上位3項目として挙げられた（図 51）。

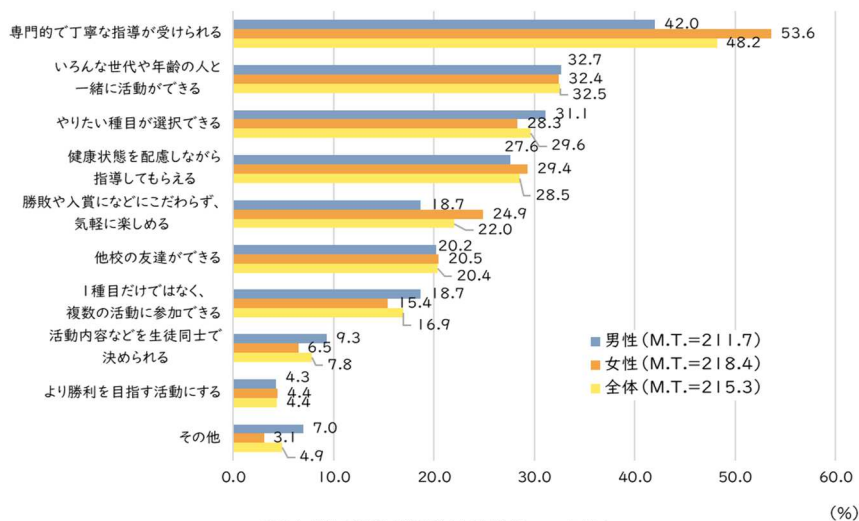


図51. 学校運動部活動地域移行へのあり方

【自由意見】佐賀市のスポーツ振興についてのご意見（一部抜粋） ※文面は記載のまま掲載

SAGA アリーナができ、若い人のスポーツを見る機会が多くなると思います。私は年なので体がついていきませんが楽しみです。	女性	60代
アーバンスポーツのストリート系のスポーツは“見た目（服装など）”がよろしくないイメージがあるので、厳しいルール運営が必要だと思います。（利用時の清掃、礼儀、時間厳守など）そこからイメージアップでやっていくのが良いのではないかと思います。	女性	50代
肩ひじ張らず、色々な階層、年齢にこだわらず、気楽に参加できるシステムを広めてほしい。	男性	70代
学校運動部活動は地域での活動に移行。と有りますが好きなスポーツを習いたい生徒は外のクラブに入会して学ぶ事ですネ！そこに月謝が発生し「行きたいけど、行けない子供も出てくるのではないのでしょうか？そこは疑問です。	女性	70代
国スポに向けて整備した施設を有効に活用してもらいたい	男性	60代
子育て世代が大人も子供も一緒に楽しめる場所を作ってほしい	女性	60代
佐賀市公式アプリにスポーツを追加してください。町内にスポーツジムがないので近隣にあれば利用したい。	女性	60代
佐賀市の取組は良いと思います。情報発信を強化して欲しい。	男性	20代
佐賀にはいろいろなスポーツのトップチームがあります。その選手たちとの交流をおこない、練習方法やメンタルトレーニングなどを色々な世代に伝えていくことで、レベルの向上につながるのではと思います。	男性	50代
佐賀バルナーズがB 1に昇格してたくさんの方がアリーナに押し寄せています。経済効果、地域の活性化につながります。市も県も全体で盛り上げていけたらと思っています。	女性	70代
様々なスポーツに取り組める施設が欲しい（例：スケートリンク）	女性	10代
施設の充実や利用料金の見直しをしてもっと市民が利用しやすくする。子供の将来を明るく活気のあるものにできるようにもっとスポーツ振興を積極的に行うべき	男性	20代
施設や設備の充実化をしてほしいと思います。（アクセスも含む）駐車場や自転車でも行きやすいようにする等があると更に取り組む人もいるのでは？	男性	40代
指導者に依るパワハラ等を見たり、聞いたりします。今は時代が違います。いい指導者の人選をお願いします。	男性	70代
市民老若男女が気軽にスポーツに参加できるよう行政にお願いしたい。今のスポーツ行政は一部の人達のために道路、土地などをつかっている。	女性	60代
小・中・高の部活動の指導者の育成が必要。複数人の指導者が必要で、勝敗、入賞などにこだわらず、気軽に楽しめる、社会人になっても楽しめる、継続できる環境にすることを目標にする。（バスケットコートを市街地に作るなど）	男性	40代
スポーツが苦手な方も振興に参画しやすいようにニュースポーツへの取組や様々な人、世代が気軽にチャレンジできるような雰囲気づくりをあわせて行ってほしいです。	男性	40代
スポーツ施設利用者のマナーアップを行ってほしい	男性	60代
スポーツだけでなく、周辺を整備した方が良い。交通アクセス、宿泊、食事、そして子供への支援、スポーツ系の活動無料化（子どもだけでいいので）	男性	30代

スポーツに関心を持ってもらう為にスポーツのみに焦点を当てるのは視野が狭い。これだけの人の興味が細分化している時代だからスポーツにプラス食・イベントなどアミューズメント感覚の入り口から間口を広くしないと、スポーツオンリーで盛り上げるのには無理がある。頭を柔らかく。	男性	30代
スポーツは社会基盤作りとして考えると重要なものだと感じています。スポーツ振興課のみなさん頑張ってください。あなた方を応援しています。	男性	50代
スポーツは好きですが、発展させるには佐賀の人口を増やすことだと思います	女性	50代
スポーツは大切だと思う。戸外で汗を流す事皆で一つの事に心を合わせる事など協力する心を育てる	女性	70代
スポーツは地域を活性化するために、なくてはならないものだと思います。まずは「みる」ことから積極的に参加しています。	女性	40代
スポーツフェス等民間が気軽に参加できる催し事があれば良いな。フェスでは難しいなら市内の色々な催し事にブースを設ける等でも良いと思う。スポーツにふれる機会があったら良い。未経験の子供たちに体験させてあげられる機会もあれば尚良い	女性	40代
スポーツリーダーの資格なら持っています。小・中学生のスポーツ指導者の叱って教えるような昭和指導は変えた方が良くと思う。	男性	40代
スポーツを通して市の経済発展や人口増加などの良い効果について目指す理想像を佐賀市は市民にアピールして欲しい。(もし、スポーツ振興に多額の予算を充てるなら)	男性	30代
部活動が地域に移行するという事で子供達同士の連携が失われないのが心配です	女性	70代
小さい子どもがいるとなかなかスポーツができません。バレーナースがやっているスポーツ教室も平日しかないの、土日で子供と一緒に、または預けてできるスポーツ教室があれば良いと思います。	女性	40代
駐車場などの整備をキチンとしたうえで、安全を第一に環境づくりを進めてほしいと思います。本当に参加したい人が参加しやすいように、また、参加したいと思えるように考えて欲しいです。	女性	40代
特にこれから高齢者も増えてくるので、病院通いより町ぐるみの簡易な運動イベントが継続してやっていくと良いと思います。	女性	60代
年をとっていき私達にとって、運動はとても大事なことだと思いますが、子育てが終わったら親の介護や孫の世話など。でも、自分で時間をみつけてサークルなどに行かなくては。後はウォーキングぐらいです。ウォーキングしやすい道や場所が近くにあればと思っています	女性	60代
普段PRを見かけないので新聞、チラシ等を利用して関心を高めていけば飛躍するのでは	男性	70代
プロ以外の選手にもサポートが欲しい	男性	20代
みんなを取り残さないスポーツへ。競い合いも必要。駐輪所整備。出入りしやすいように。一人スポーツ。	女性	70代
無料なら色々なスポーツに参加したいです。	女性	50代
目的をアスリートを育てるためではなし。地域のより多くの人々が楽しくスポーツを交流できる環境を整える(※提供する)ことを第一の目的にしてほしい	男性	50代
私はスポーツ系ではありませんが、アリーナもできて佐賀のためにもスポーツでもりあげていくことをぞみます。アリーナでもいろんなアイデアで気軽にいけるところになればいいですね	女性	60代
私もですが高齢化社会のため、高齢者が気軽に参加できるリズム体操、ストレッチ体操などで施設を利用できたら良いと思いました。	女性	50代

## IV. まとめ

ここでは、Ⅲ. 調査結果の概要で述べた「する」「みる」「ささえる」スポーツの視点を中心にまとめることとする。

### 1. 「する」スポーツ

調査の結果、日常的（週に1日以上）に運動やスポーツを行っている人（以下、定期的実施者）の割合は全体で49.5%となった（図6）。これは、前回調査（2018年）時の41.7%を7.8%上回っている。また、前々回調査（2013年）時の45.1%より4.4%上回っていることから、この10年間のスポーツ推進計画（取組）の効果として捉えることができるが、一方で運動不足を感じている人が全体で約8割存在していることは看過できない（図5）。

実施率の年代別比較では、30代から50代「働き盛り世代」の実施率の低さが明らかになったことから、対象の状況に応じた対応策が求められる。また、まったく運動やスポーツ行わなかった人の割合が24.5%存在し、25.9%を示した前回調査から僅かな減少に留まっていることから、定期的実施者とそうでない人（以下、非定期的実施者）の二極化傾向として注視しておきたい。なお、非定期的実施者の理由を見てみると、「仕事や家事が忙しい」が全体で約5割を占め、特に女性の割合が高くなっている（図10）。他の上位理由項目を踏まえて勘案すると、身体の状況や年齢、性別に縛られず、誰もがどこでも気軽にできる運動の紹介や体験機会を提供するなどの対策が必要である。

市民が参加したいスポーツ行事としては、全体で「野外活動的行事（キャンプ、ハイキングなど）」と「レクリエーション的行事（運動会など）」が高い割合を示したが、女性は「教室」型、男性は「競技会」型を好む傾向が明らかになったことから、ターゲットを絞り対象に応じた目的とプログラムの設定が重要になる（図12）。

### 2. 「みる」スポーツ

テレビを含めたスポーツ観戦については4割を超える人たちが「週に1時間以上」行い（図13）、プロスポーツの直接観戦は約3割が経験している（図14）。これらは、「話題として必要」や「生活を豊かにするために必要」の割合が高かったことから、日常生活におけるコミュニケーションの一部になっている様子が伺える（図15）。今後も魅力ある大会やイベントの開催の企画と同時に、地元プロスポーツの観戦を契機に継続的なスポーツへの関与を促す仕掛けづくりが求められる。

また、6割を超える人がトップチーム等の合宿・キャンプを積極的に誘致することについて賛成し（図19）、その理由として「地域の活性化」の選択率が約7割となっていることから（図20）、トップチームの観戦や交流機会を契機とした、市民のスポーツ参画をはじめ、地域振興へつなげる工夫（取組）が重要になる。

### 3. 「ささえる」スポーツ

過去1年間のスポーツボランティア参加については、「ある」と回答した人の割合が8.6%であり、11.3%を示した前回調査、前々回調査の値15.0%を下回る結果となった（図23）。一方、25.0%の人が今後の活動に肯定的な意識を持っていることから、まずは、この潜在的参加希望者が具体的な行動へつなげる情報提供等が必要である。

#### 4. その他

総合型地域スポーツクラブの認知度は、全体で 7.7%であり、前回調査の 6.5%から微増となった（図 30）。

障がい者スポーツ（パラスポーツ）に対する関心度が前回調査から 1 割以上増加して 5 割を超えていることや（図 46）、アーバンスポーツ実施への取組についても約半数が賛成し反対もわずかであることから（図 50）、多様なスポーツに対する環境整備等が求められている。

そして、本市の『スポーツ競技力向上のために必要なこと』（図 49）については、「ジュニアアスリート発掘・育成事業の充実」が最も多く、『学校運動部活動の地域移行へのあり方』（図 51）では「専門的で丁寧な指導が受けられること」の項目が最も多くなっている。

これらと関連して、本市スポーツ振興への市民による意見の中には、SAGA2024 国スポ・全障スポ大会後や地元を拠点とするプロチームとの連携を通じた「地域振興」を期待するものがある。これら市民の率直な意見を参考にしながら、本市のスポーツにおける現状と課題を整理し、今後のスポーツ推進につながる具体的な取組を行っていくことが求められている。

# 佐賀市民のスポーツに対する意識と活動の実態に関する調査

## 【障がい者対象】集計結果

### I. 調査の目的

佐賀市スポーツ推進計画を策定するにあたり、障がいのある市民の運動やスポーツに対する意識やそれらの実施状況を把握することを目的とする。

### II. 調査概要

#### 1. 調査対象者

身体障害者手帳、療育手帳 B 及び精神障害者保健福祉手帳所持者のうち、18 歳以上の男女 600 人

#### 2. 調査時期

令和 5 年 12 月 19 日～令和 6 年 1 月 19 日

#### 3. 調査方法

令和 5 年度の身体障害者手帳、療育手帳 B 及び精神障害者保健福祉手帳所持者のうち 18 歳以上のものを障がいの種ごとの割合に応じて対象者数を算出。年齢区分ごとに均等に男女別の対象者数を算出した 600 人（男女各 300 人）に対し、郵送により調査票を送付。同封の返信用封筒により調査票の回収を行った。

#### 4. 回収状況

送付数	600 部		
回収数	206 部	回収率	34.3%
有効回収数	187 部	有効回収率	31.2%

#### 5. 調査結果の見方

アンケート質問項目については、原則として、本市が平成 30 年に実施した調査（以下、「前回調査」）と同じものを設定し結果を比較できるようにした。その他本市独自の項目を追加している。

グラフや表の数値は、全体か男女別の回答者数を 100 とした百分率（%）で表示している。

また、複数回答の場合に記載している、表中の M. T.（Multiple Total の略）とは、回答数の合計を対象者数で割った比率であり、比率の合計が 100%を超える場合がある。

グラフや表の全体集計には性別不明の回答も含まれるため、男女別集計の合計と一致しない場合がある。また、年齢別集計で「10 代」となっているのは、調査対象となる 18・19 歳のみの集計となっている。なお、集計は小数点以下第 2 位を四捨五入しているため、回答比率の合計は必ずしも 100%にならない場合がある。

### Ⅲ. 調査結果の概要

#### 1. 回答者の基本的属性について

男女比については、「男性」50.2%、「女性」48.7%でほぼ同数（図1）。年齢では、「60代」が19.5%と最も多く、10代を除いて、ほぼ同率の割合となっている（図2）。

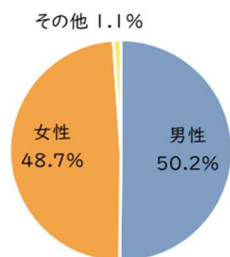


図1. 回答者の性別

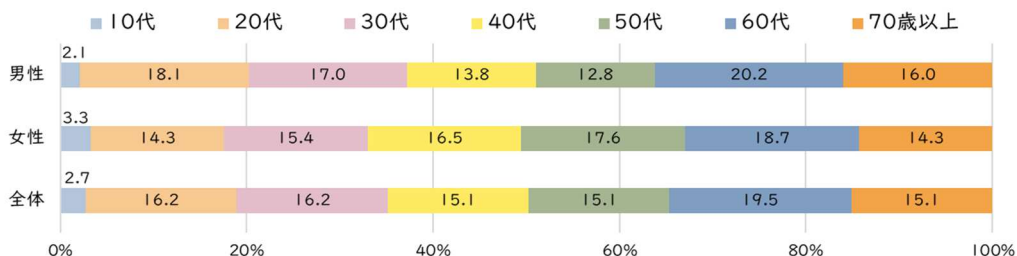


図2. 回答者の年代

居住地については、全体で「旧佐賀市」が約7割となっている。次に「大和町」10.8%、「川副町」7.6%が続いている（図3）。

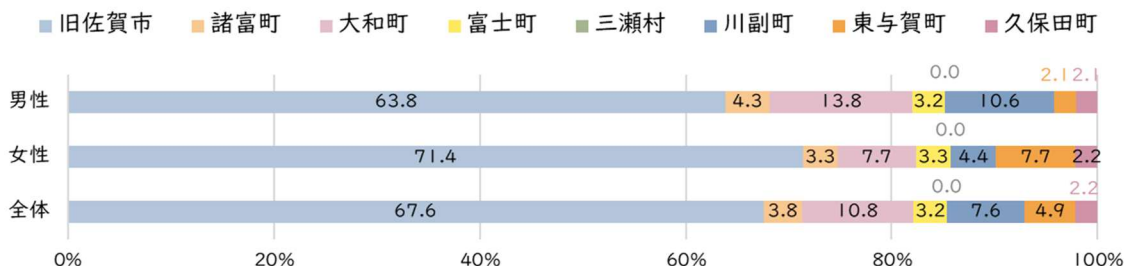


図3. 回答者の居住地

回答者の職業は、「無職」が最も多く全体で約3割となっている。次いで「お勤め（パート・アルバイト）」22.3%、「お勤め（フルタイム）」15.8%が多い（図4）。

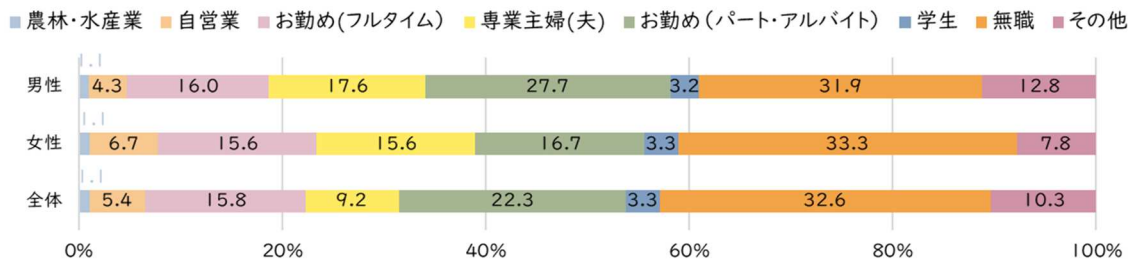


図4. 回答者の職業

回答者の障がいの種別は、「肢体不自由」が最も多く約4割、次いで「内部障がい」が約3割となっており（図5）、障がいの程度は「一人で動ける」が最も多く、約5割を占めていた（図6）。

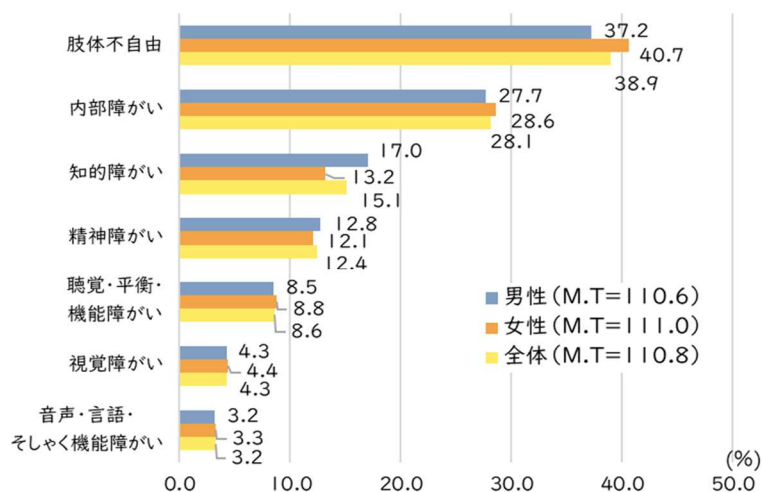


図5. 障がいの種別

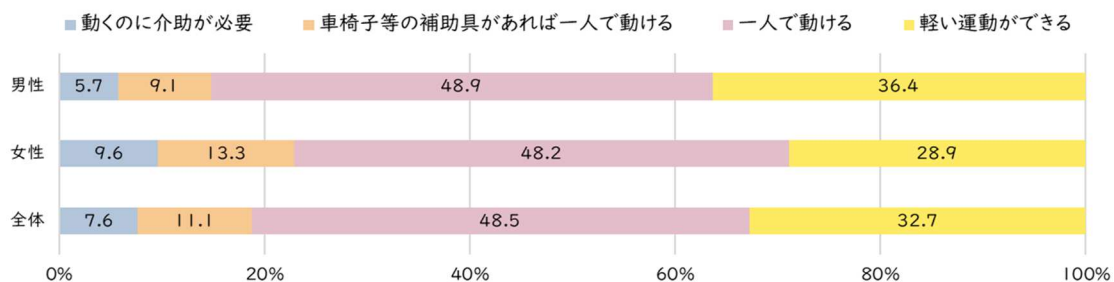


図6. 障がいの程度

## 2. 「する」スポーツについて

普段の運動不足感についてたずねたところ、全体で 75.9%が「感じる（大いに感じる+ある程度感じる）」と回答した。特に、「大いに感じる」を見ると、男性が約 3 割に対して女性が約 5 割と、女性の方がより顕著である傾向が示された（図 7）。

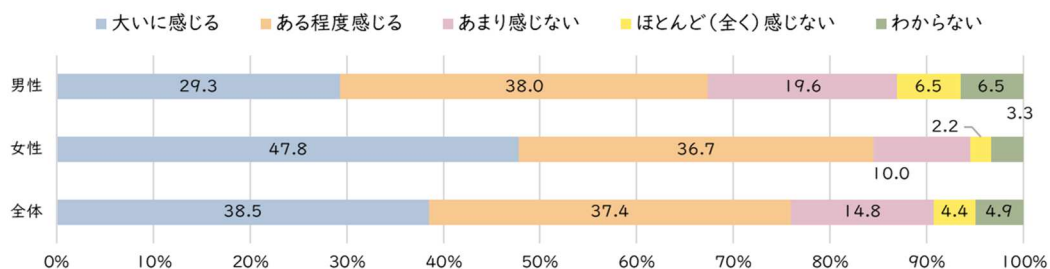


図7. 運動不足を感じているか

運動・スポーツの実施頻度を見ると、「週に 1 日以上（「週に 3 日以上」+「週に 1～2 日」）実施している人（定期的実施者）は、全体で 41.9%を示し、前回調査から 2.6%の増である。性別比較では、男性は 42.0%、女性は 41.8%とほぼ同等となった。しかし、「まったく行わなかった」が全体で 40.8%と前回調査とほとんど変わっていない（図

8)。年代比較で見てみると、「70歳以上」の割合が5割と最も高く、年代が下がると割合も低下する傾向がみられるが、「40代」の定期的実施者が最も低い。また、「20代」の約5割が「まったく行わなかった」と回答している（図9）。

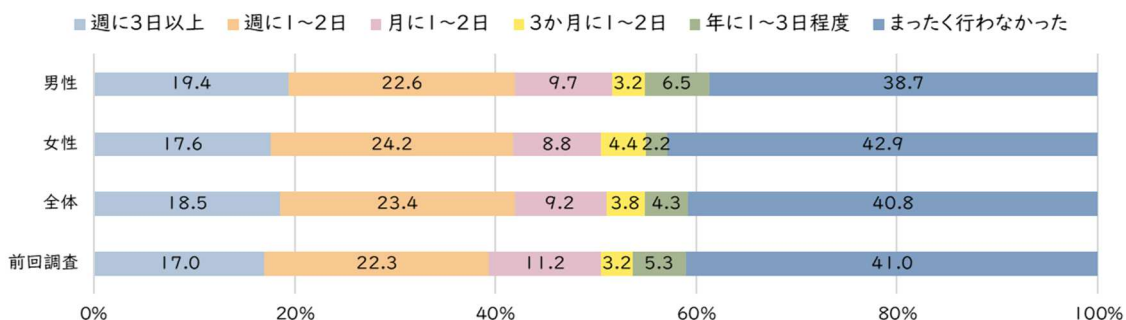


図8. 運動・スポーツの実施頻度(性別)

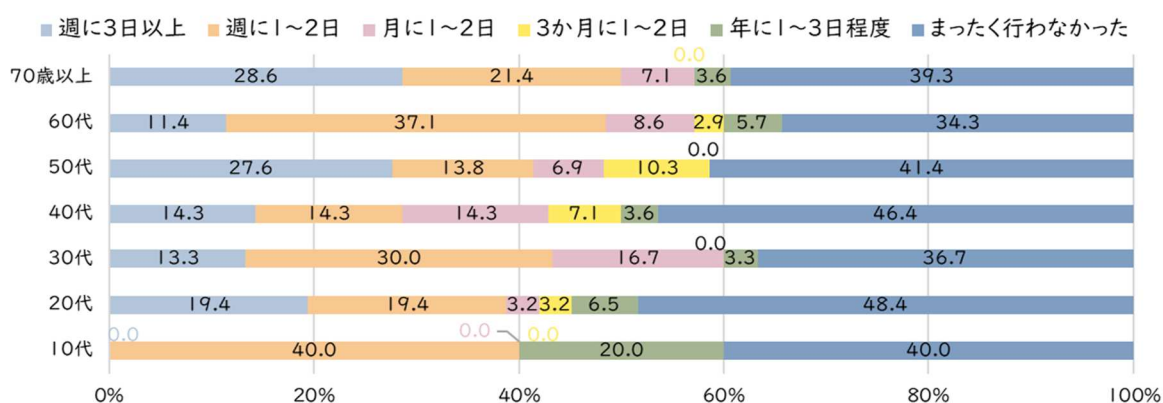


図9. 運動・スポーツの実施頻度(年代別)

運動やスポーツの実施日については、「男性」は週末、「女性」は平日の割合が高い傾向を示している（図10）。

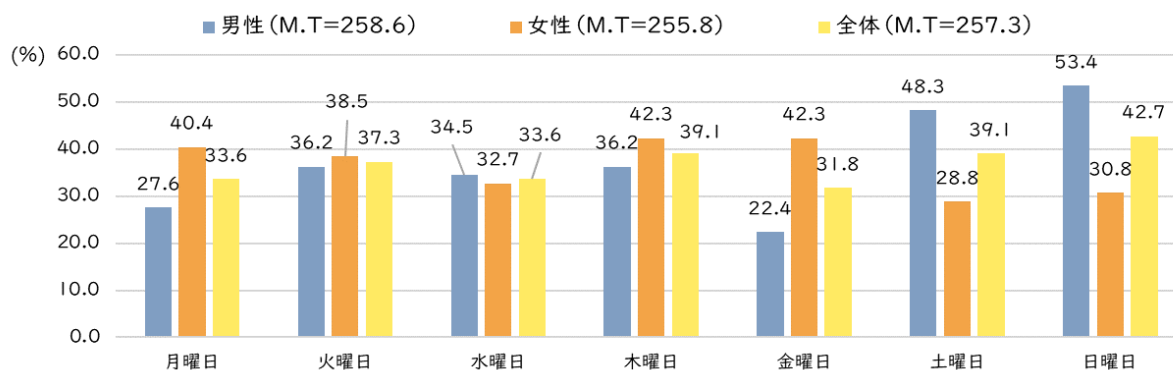


図10. 運動・スポーツの実施日

運動やスポーツを行う目的について見てみると、全体の上位3項目は、「健康のため」58.2%、「体力増進・維持」42.7%、「楽しみ・気晴らし」34.5%となっている（図11）。

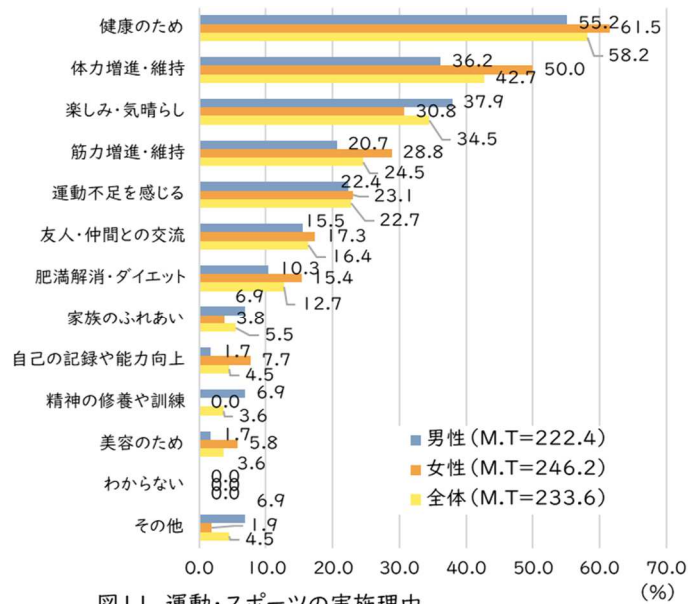


図11. 運動・スポーツの実施理由

過去1年間に行った運動・スポーツについては、下記の表の結果が得られた。「トレーニング」が男女ともに割合を増やし順位が上がっている。また、「階段昇降」が新たな項目として設定され上位にあがっている。

順位	全体	男性	(前回調査)	女性	(前回調査)
1位	ウォーキング(含、散歩・ぶらぶら歩き)(64.5)	ウォーキング(含、散歩・ぶらぶら歩き)(56.9)	ウォーキング(含、散歩)(59.6)	ウォーキング(含、散歩・ぶらぶら歩き)(73.1)	ウォーキング(含、散歩)(50.9)
2位	体操(ラジオ体操・美容体操)(23.6)	トレーニング(筋力・トレッドミル等)(20.7)	ラジオ体操(21.1)	体操(ラジオ体操・美容体操)(30.8)	ラジオ体操(28.3)
3位	トレーニング(筋力・トレッドミル等)(18.2)	体操(ラジオ体操・美容体操)(17.2)	サイクリング(14.0)	トレーニング(筋力・トレッドミル等)(15.4)	ストレッチ(20.8)
4位	階段昇降(13.6)	階段昇降(15.5)	ボウリング(12.3)	階段昇降、水泳(11.5)	トレーニング(13.2)
5位	障がい者スポーツ(パラスポーツ)(10.0)	障がい者スポーツ(パラスポーツ)(13.8)	トレーニング・ストレッチ(10.5)	—	水泳(11.3)

運動やスポーツを「週1回以上していない」理由は、全体で「病気やけがをしている」25.9%、「面倒くさい」20.4%、「特に理由はない」16.7%の順で、割合が高くなっている(図12)。

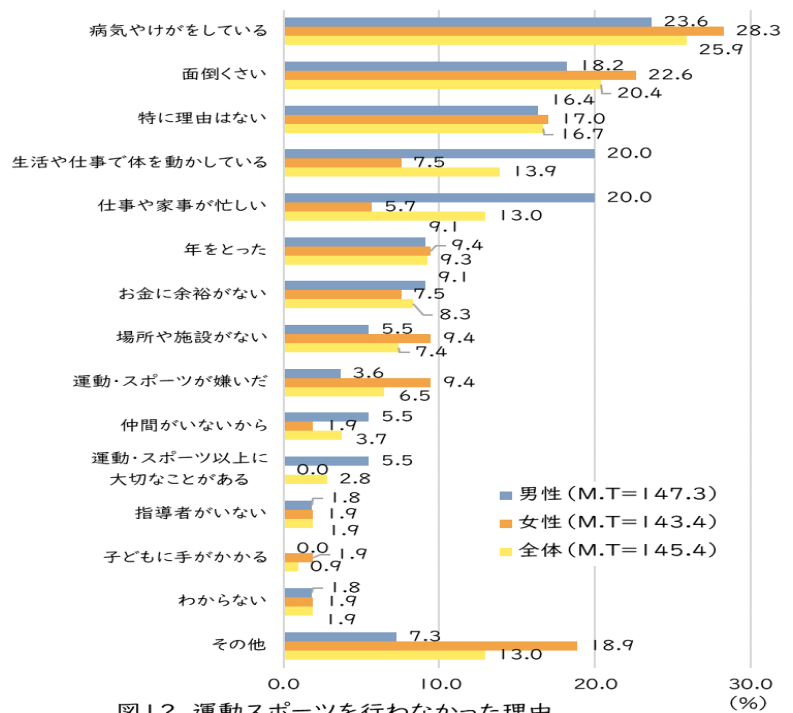


図12. 運動スポーツを行わなかった理由

ニュースポーツ及び障がい者スポーツの実施体験種目についてみると、「どれも体験したことがない」という回答が最も多く、約 6 割を占めた。実施種目で最も多い割合を示したものは、「ボッチャ」の 15.7%となっている（図 13）。

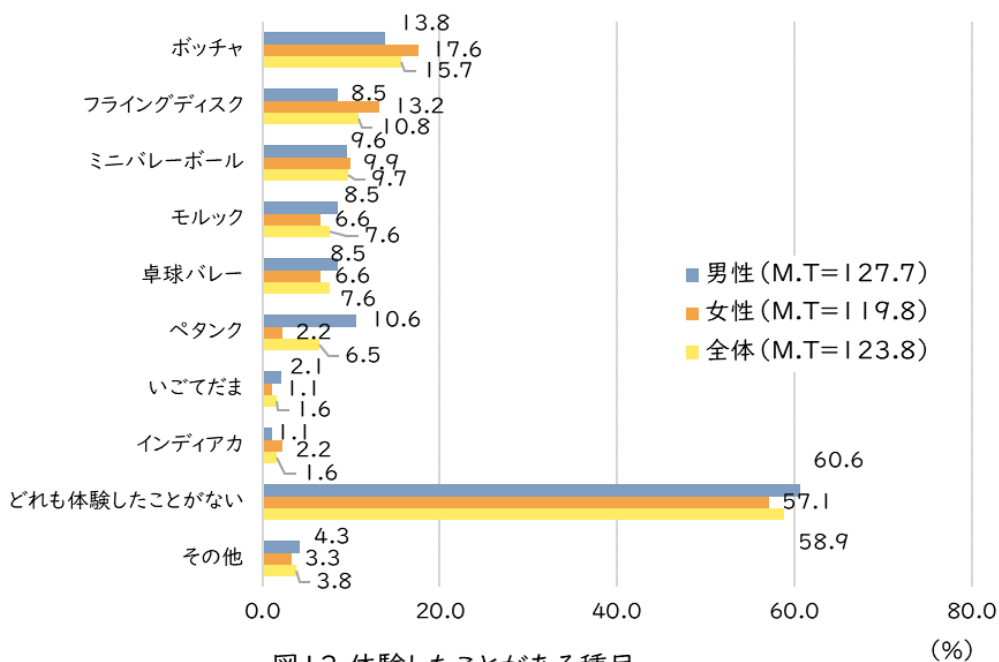


図 13. 体験したことがある種目

今後、参加したいスポーツ行事について、女性は、「スポーツ教室」が最も多く、男性は、「レクリエーション的行事」という回答が最も多く、前回調査と同様の結果となった（図 14）。

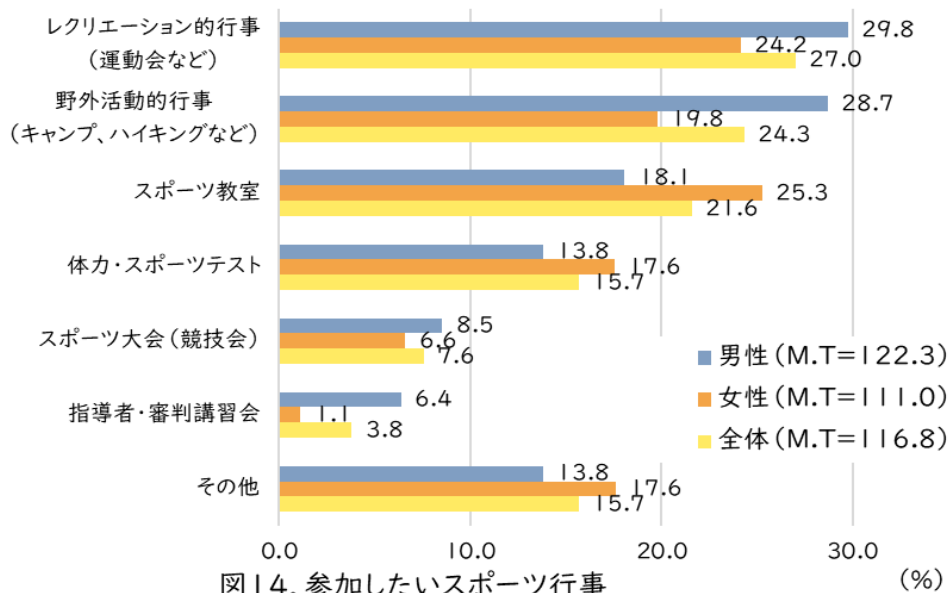


図 14. 参加したいスポーツ行事

### 3. 「みる」スポーツについて

スポーツ観戦（テレビ観戦含む）の時間は、男性のほうが長い結果となった。特に、「週に1時間以上」の値が女性より男性の方が約2倍高くなっている（図15）。

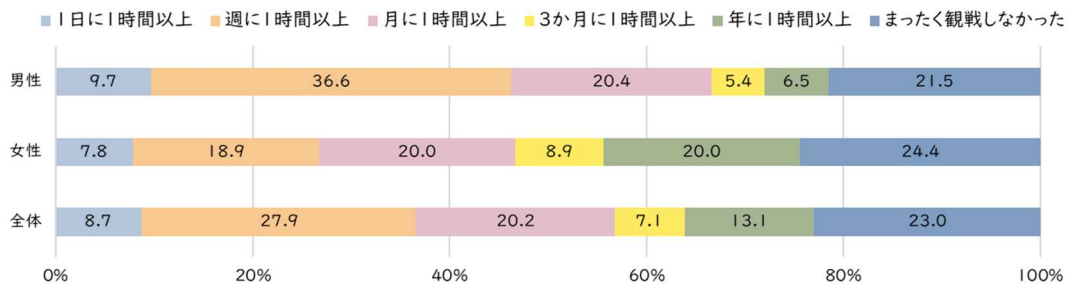


図15. スポーツ観戦の有無

過去1年間のプロスポーツ観戦方法について見てみると、ほぼ全員が観戦していることが分かった。そのうち、『「試合会場で直接観戦した」のみ』は僅かであるが、「どちらもした」を含めると約2割が直接観戦を経験している（図16）。

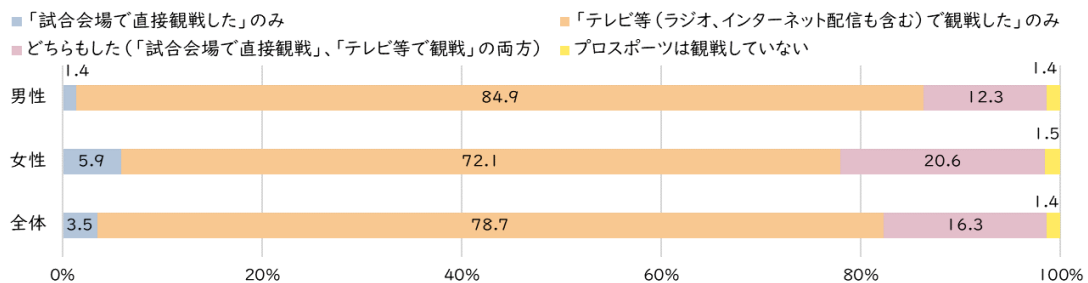


図16. プロスポーツの観戦方法

「みるスポーツ」の意味合いとしては、全体で「話題として必要」27.8%、「生活を豊かにするために必要」19.0%の順に割合が高い。男性で「日常生活の一部として欠かせない」が高い値を示していることから、生活の中でのコミュニケーションの一部となっている様子が伺える（図17）。

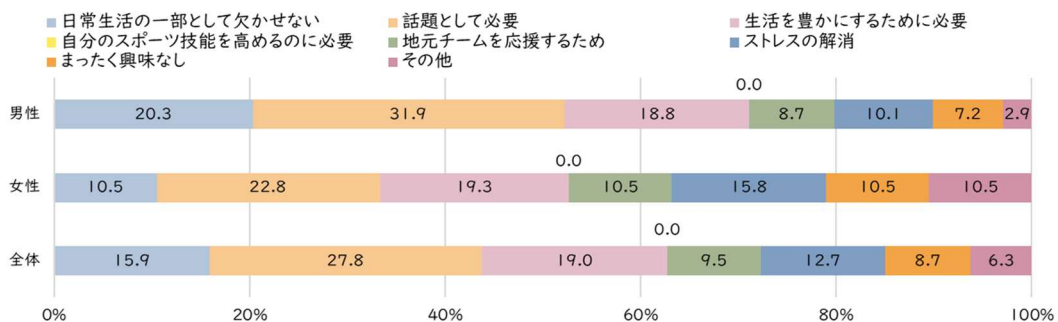


図17. 「みる」スポーツの意味合い

プロ・代表チーム等、トップレベルのチームや選手との交流について、「ある」と回答した割合は全体で12.0%という結果である（図18）。その交流内容については、「その他」を除いて、全体では、「競技の教室」が最も高い（図19）。

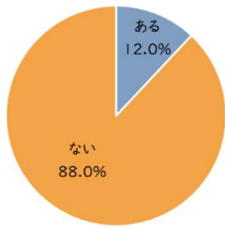


図18. トップレベルのチームや選手との交流

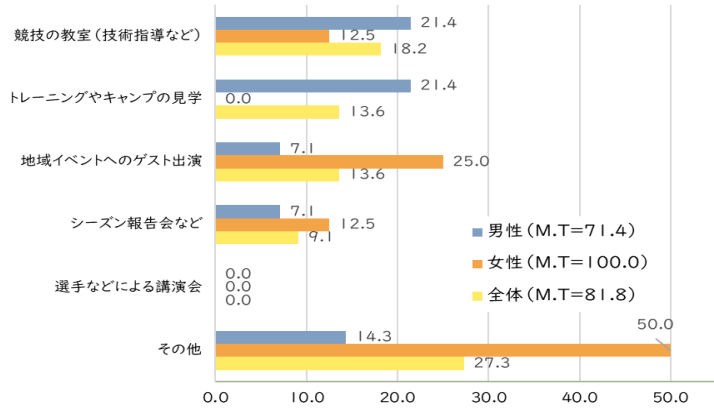


図19. 交流内容

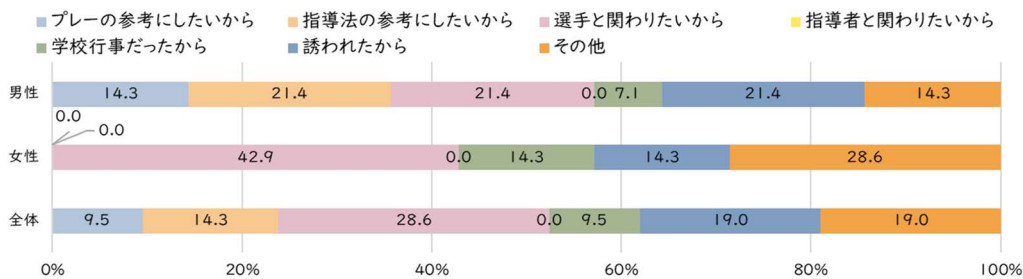


図20. 交流した理由

スポーツの合宿・キャンプ誘致については、「積極的に誘致すべき」が全体で5割を超えている(図21)。その主な理由として、「指導者と関わりたい」、「スポーツ実施者が増える」、「市の宣伝効果がある」の順で高い割合となっている(図22)。なお、「誘致する必要はない」の主な理由は、「興味がないから」となっている(図23)。

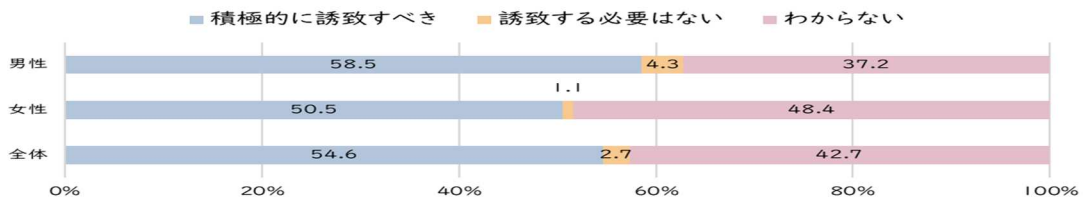


図21. キャンプ誘致の是非

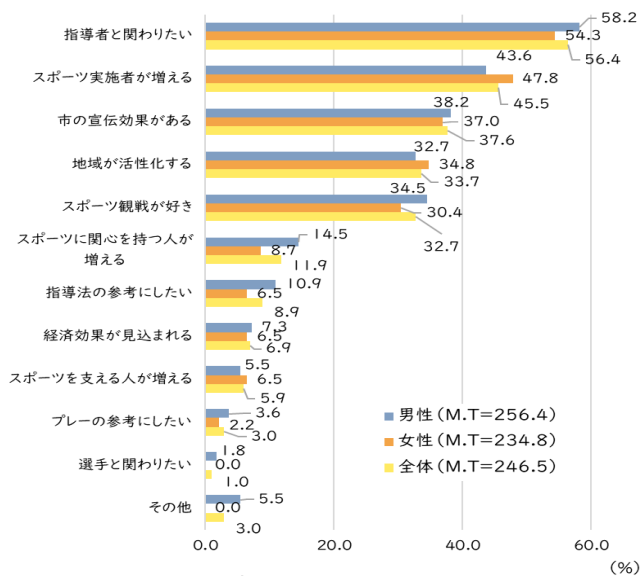


図22. キャンプを積極的に誘致すべき理由

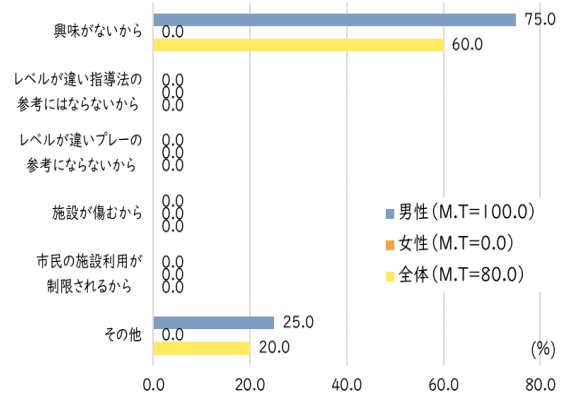


図23. キャンプを誘致する必要がない理由

#### 4. 「支える」スポーツについて

本市スポーツボランティア登録制度の認知度については、「知っている」が全体で 11.5%となっている（図 24）。

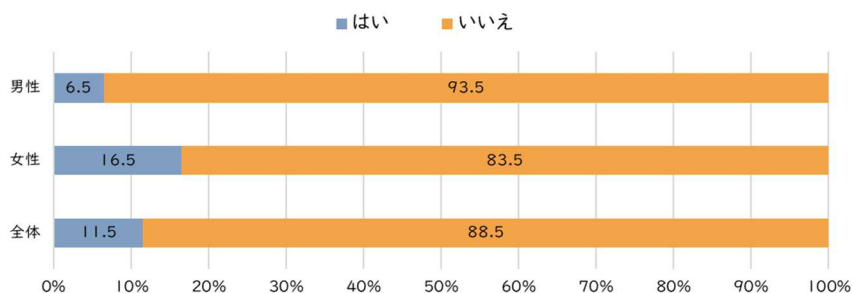


図24. スポーツボランティア登録制度の認知度

自分自身が、ボランティアから支援を受けたことがあるかについてたずねたところ、全体で 14.2%が「ある」と回答し、前回調査より 3.7%低い値となった（図 25）。その際の満足度は、男女ともに 100.0%「満足（非常に満足+まあ満足）」であった（図 26）。

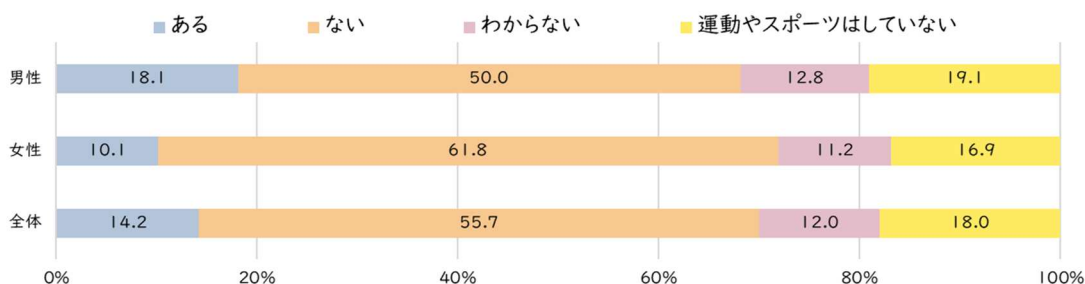


図25. スポーツボランティアからの支援を受けたことがあるか

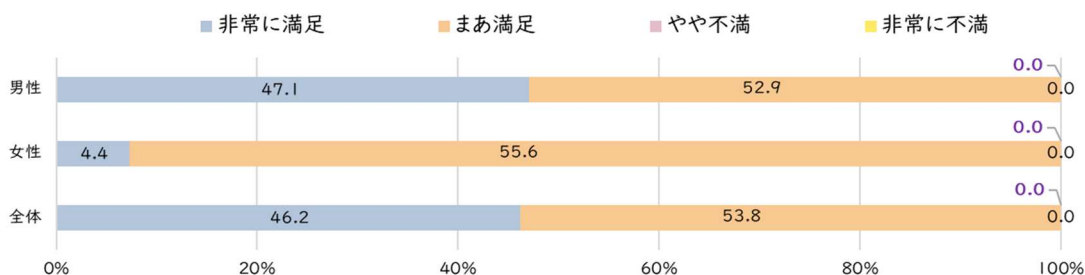


図26. スポーツボランティアからの支援の満足度

過去 1 年間におけるスポーツボランティア経験をみても、参加経験が「ある」人は全体で 3.8%であり、前回調査の 6.8%からほぼ半減している（図 27）。

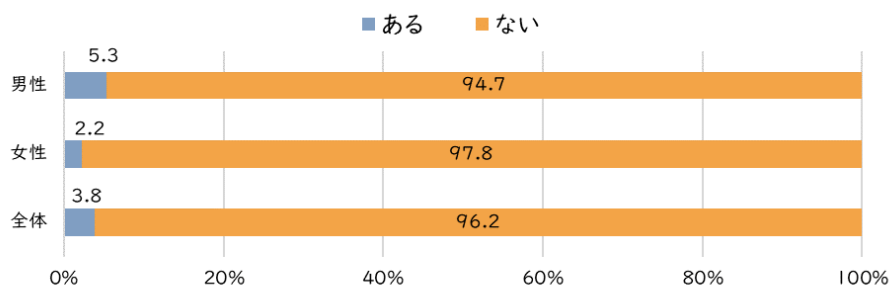


図27. スポーツボランティアへの参加の有無

スポーツボランティアの参加の理由（経緯）は、女性は10割が「自ら応募して」、男性は6割が「スポーツ関係団体から頼まれて」という結果となり、男女で異なることが分かった（図28）。参加の感想としては、男女ともに「楽しかった」が最も多くなっている（図29）。

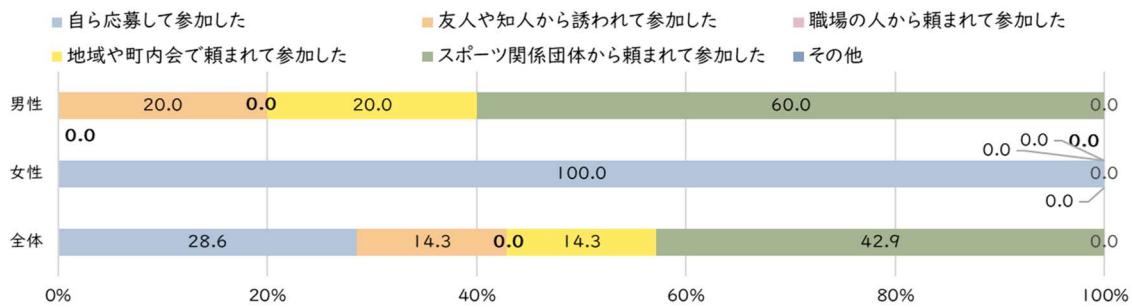


図28. スポーツボランティア参加の理由

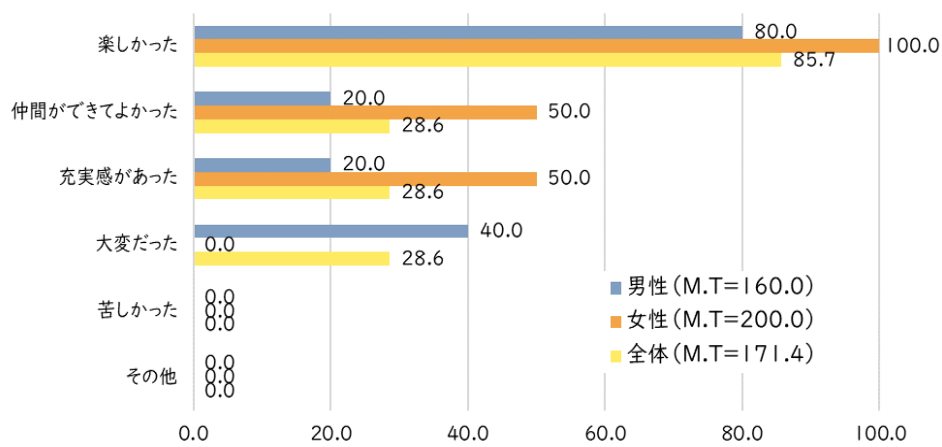


図29. スポーツボランティア参加の感想

スポーツボランティアに参加したことがない人を対象に、その理由を自由記述でたずねて回答をカテゴリー化した結果、「知らない」33.6%が最も高い割合を示し、次に「身体的理由」13.8%、「興味・関心がない」13.2%が続いている（図30）。

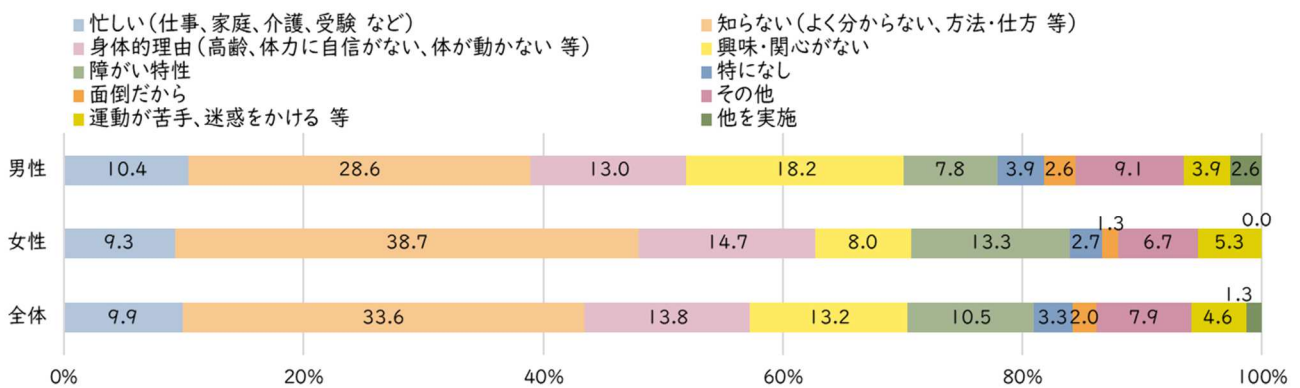


図30. スポーツボランティアへ参加したことがない理由

今後のスポーツボランティア活動への参加意識については、全体で「行いたい（是非行いたい+できれば行いたい）」と回答した人が15.9%を占め、前回調査の20.2%より低下している。さらに、「行いたいとは思わない（あまり行いたいとは思わない+まったく行いたいとは思わない）」は43.4%となっており、男性の方がより顕著な傾向を示している（図31）。

なお、「是非行いたい」「できれば行いたい」と回答した人のボランティア内容については、「障がい者向けの教室」が最も多く、その他の内容はほぼ同じ割合となっている（図32）。

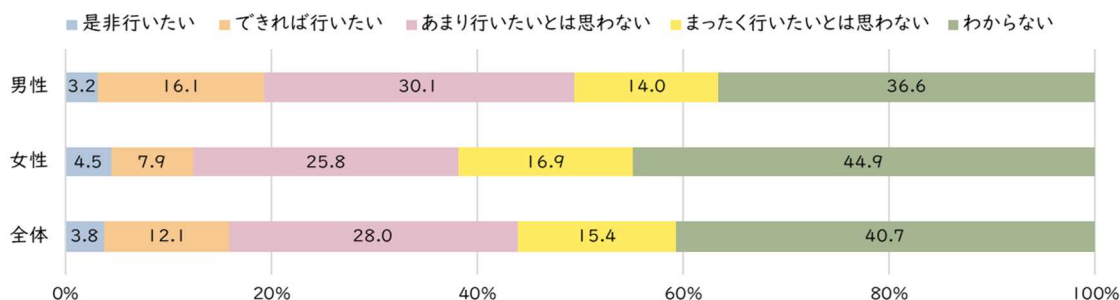


図31. スポーツボランティアへの参加意識

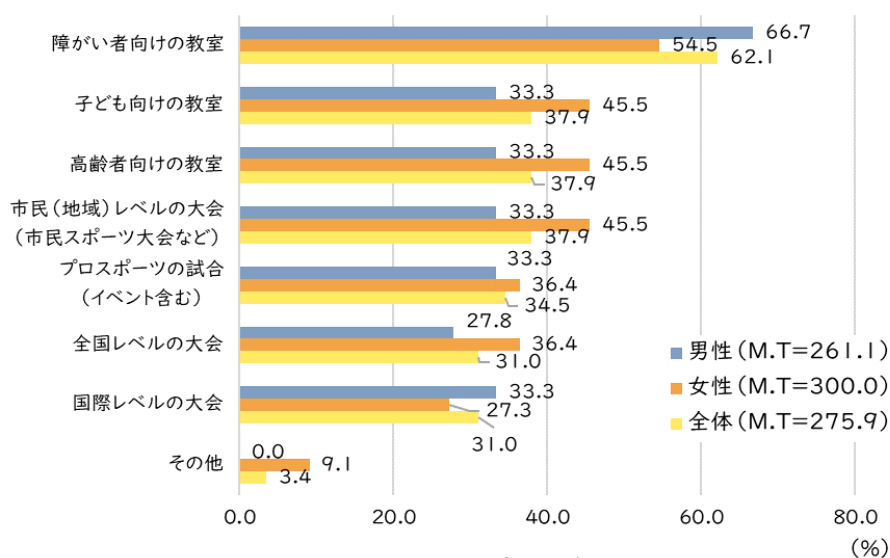


図32. 参加したいスポーツボランティア

## 5. 総合型地域スポーツクラブについて

総合型地域スポーツクラブの認知度について、「知っている」人は全体で 3.8%であり、前回調査の 6.2%を下回る結果となったが、「聞いたことがある」11.4%で、前回調査 5.1%を上回っており、認知度は高まってきている（図 33）。

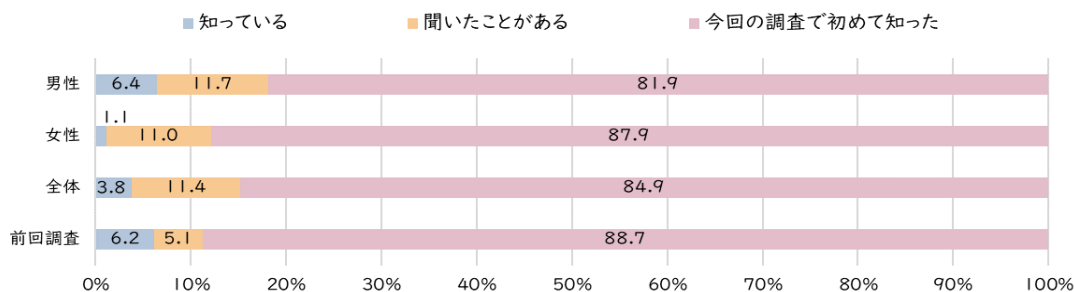


図33. 総合型地域スポーツクラブの認知度

総合型地域スポーツクラブへの加入意思については、全体で「（既に）加入している」が 0.6%、「加入したい」が 2.8%と低い（図 34）。それ以外の「加入していない」及び「加入したくない」人の理由については、前回調査と同様に全体で「障がいがある」が最も高い割合を占め、「活動内容がわからない」、「情報がない」、「きっかけがない」が続いている（図 35）。

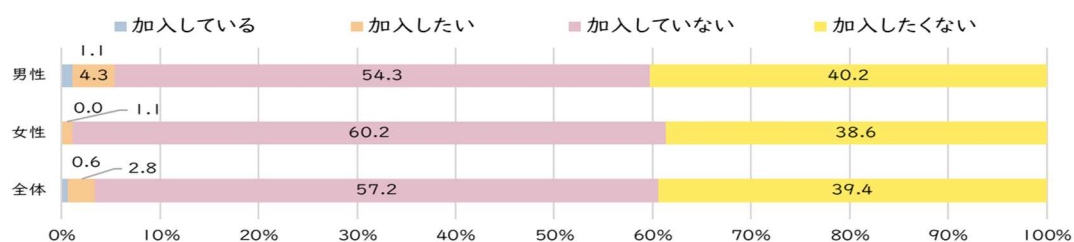


図34. 総合型地域スポーツクラブへの加入意識

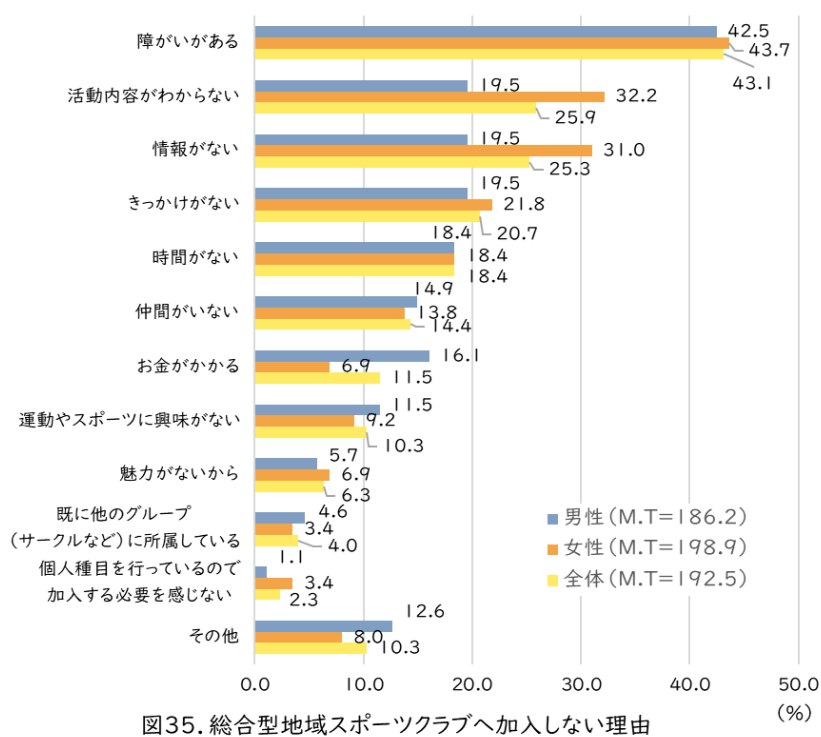


図35. 総合型地域スポーツクラブへ加入しない理由

## 6. 施設について

学校体育施設の利用については、「利用したことがある」もしくは「空き状況を確認したことがある」と回答した人の割合が全体で17.2%を占めており、前回調査の9.6%を上回っている。全体の5割程度が、「今回の調査で初めて知った」と回答している（図36）。

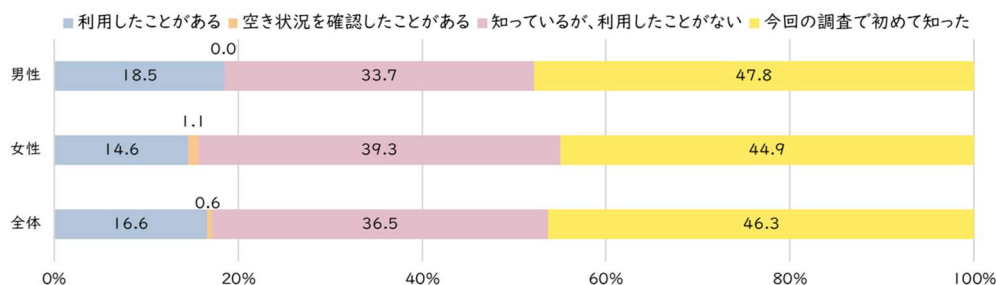


図36. 学校体育施設の利用

日頃、運動・スポーツを実施する場所としては、全体では割合の高い順に、「自宅・友人宅」、「公園・広場」、「道路や空き地」となっており、前回調査と同じであった（図37）。

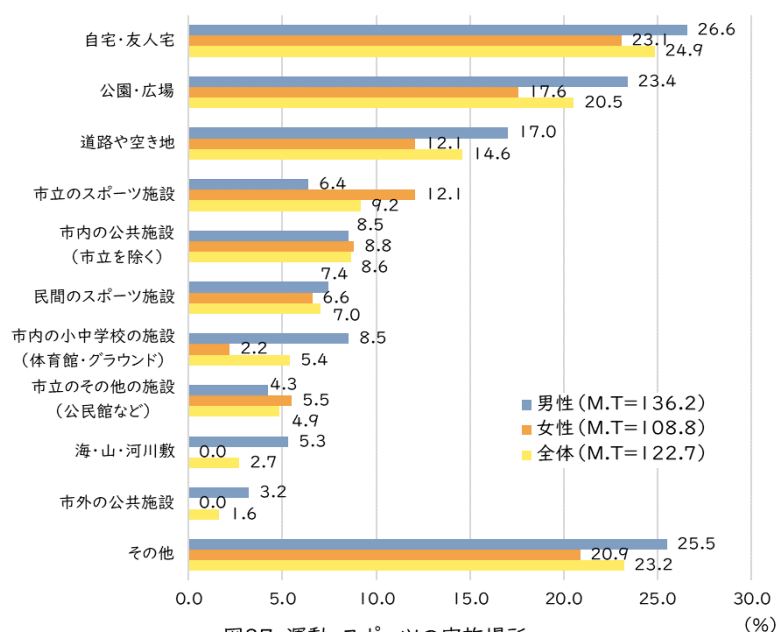


図37. 運動・スポーツの実施場所

運動やスポーツを実施する時間帯については、全体では前回調査と同様に「午前」が最も多く3割を超えている。また、午前以外では、男性は「夕方」、女性は「夜間」の割合がそれぞれ高くなっている（図38）。

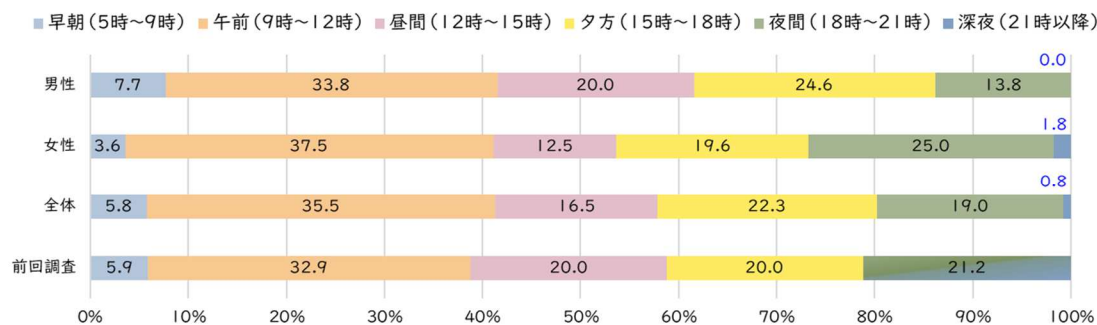


図38. 運動・スポーツの実施時間帯 (性別)

実施時間帯を年代別で見ると、10代以外の全体的傾向として、年代が高くなれば「早朝」と「午前」の時間帯の割合が増え、逆に年代が低くなれば「夜間」以降の時間帯が増えている（図39）。

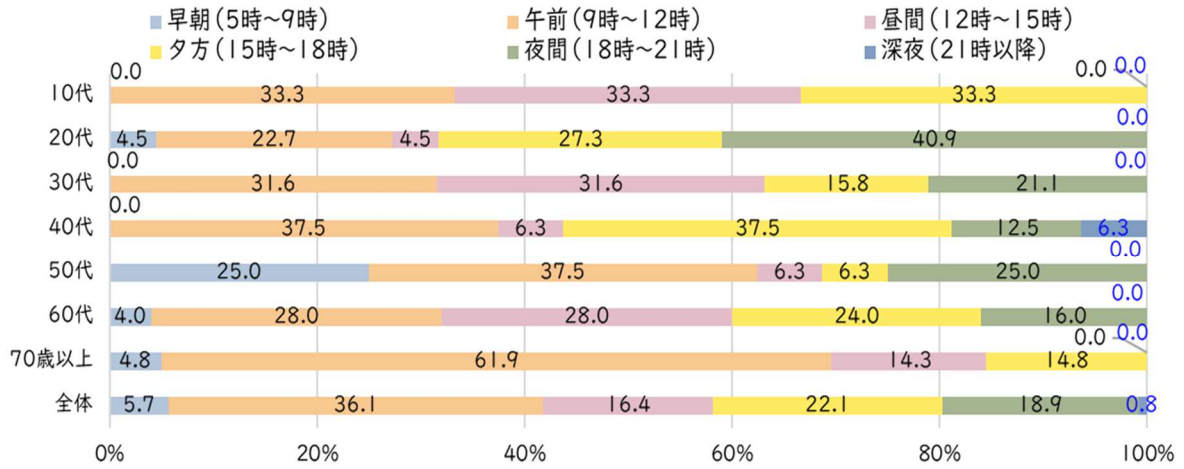


図39.運動・スポーツの実施時間帯（年代別）

実施場所までの移動手段は、全体で「自家用車、バイク」と「徒歩」の割合が多く、約3割ずつを占めている。なお、「送迎（家族による送迎+家族以外の人による送迎）」は17.0%と前回調査とほぼ同様であった（図40）。

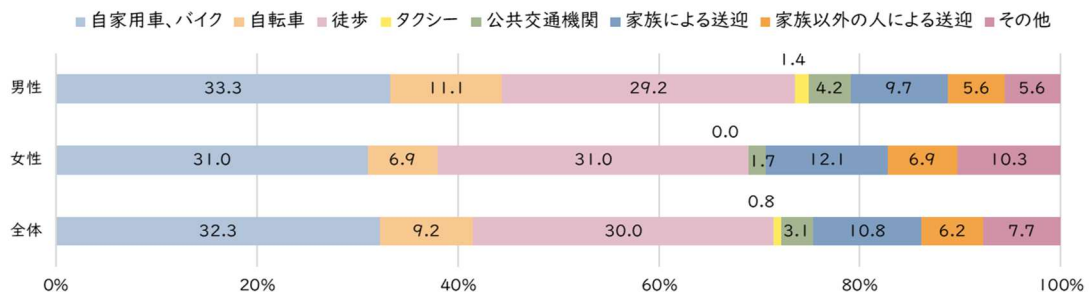


図40. 運動・スポーツを実施する場所（施設）への移動手段

普段の運動やスポーツを実施している場所に対する満足度については、約8割の人が「満足（非常に満足+まあ満足）」と回答しており、「不満（やや不満+非常に不満）」の約2割を大きく上回っている（図41）。

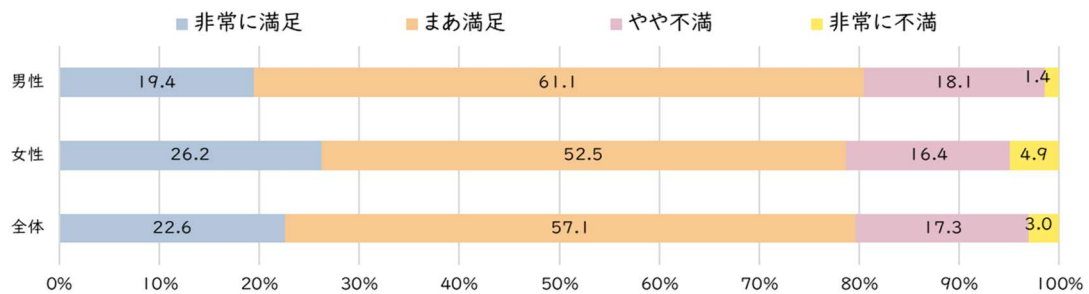


図41. 運動・スポーツをする場所（施設）の満足度

普段、運動やスポーツを行っている場所（施設）への不満の理由については、全体で「家から遠い」という立地に対する回答が最も多く、男性でも最も高い割合となっている。女性で最も高い割合を占めた理由は、「利用手続きが面倒だから」である。なお、「したいと思っているスポーツ種目ができない（施設や用具が整っていない）」が全体で2番目に高い割合を占めていることにも注視する必要がある（図42）。

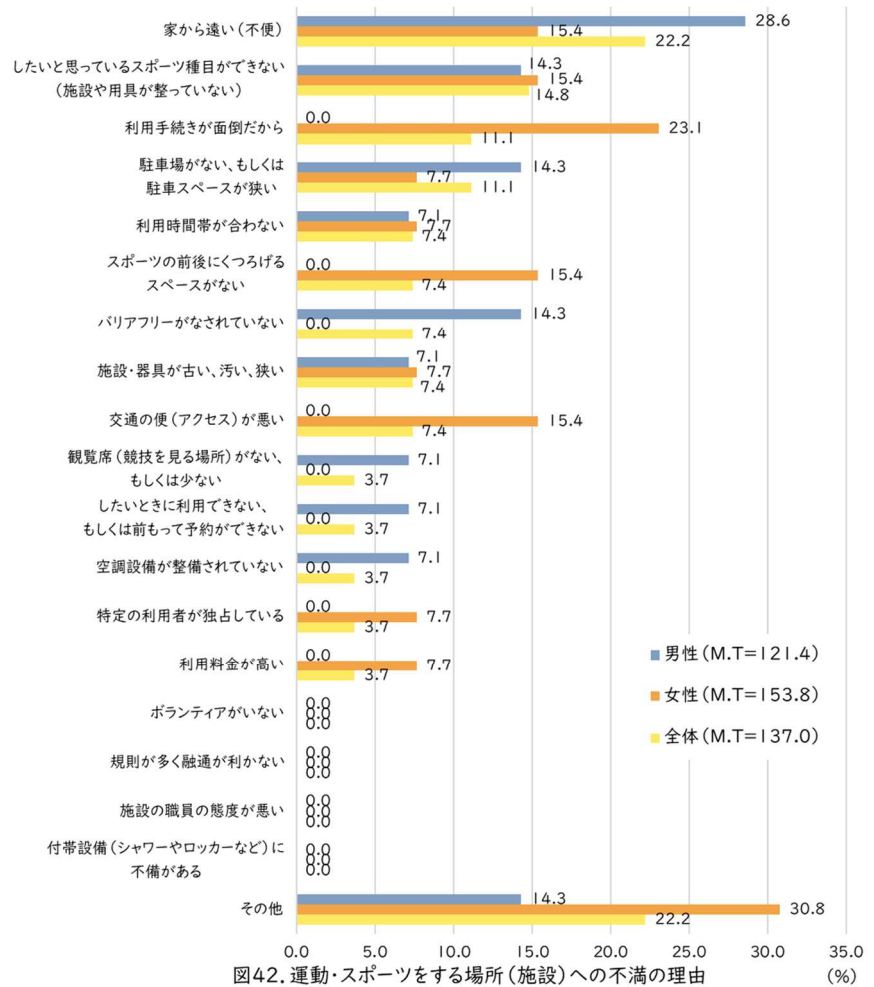


図42. 運動・スポーツをする場所(施設)への不満の理由 (%)

市立のスポーツ施設に対する要望としては、約半数が「特になし」としている。全体では、「運動やスポーツ教室の充実」、「利用料金の引き下げ」、「空調設備の整備」の順で高い割合を示す結果となっている（図43）。

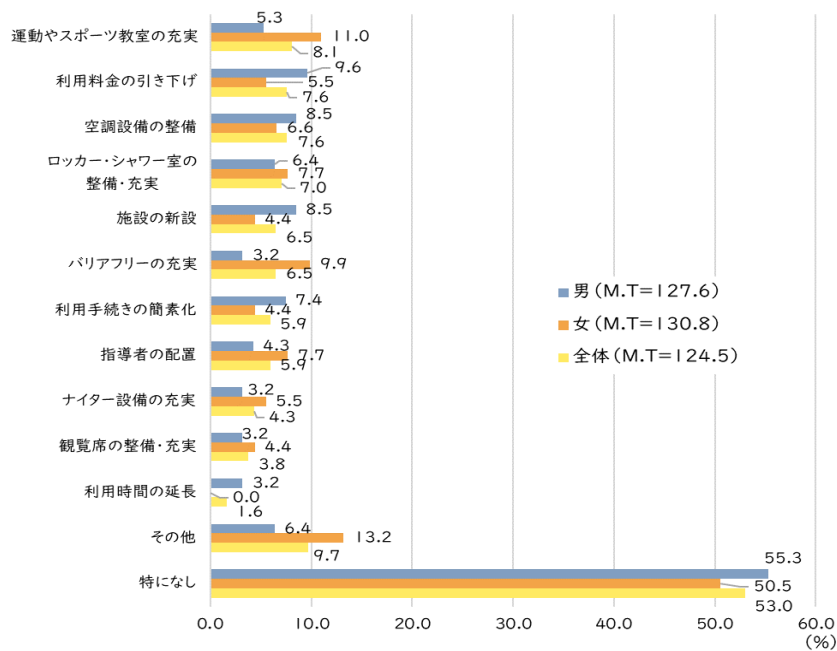


図43. 市立のスポーツ施設への要望 (%)

施設予約システムの利用については、「予約したことがある」と答えた人は全体で 5.7%、「空き状況を確認したことがある」が 1.7%と前回調査から僅かながら上回っている。なお、「今回の調査で初めて知った」の割合は約 4 割と横ばいとなっている（図 44）。

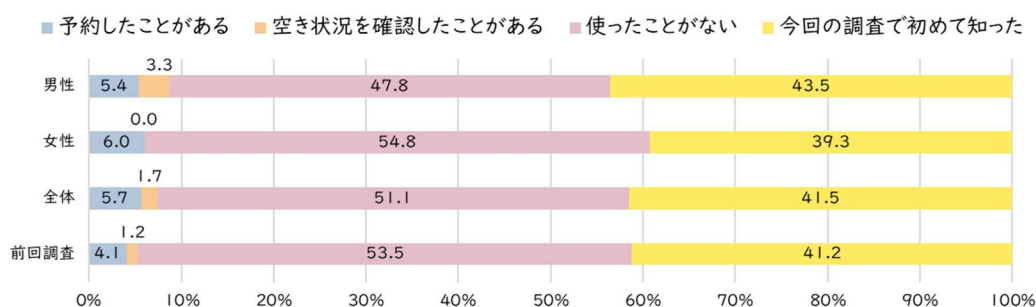


図44. 市立の運動・スポーツ施設予約システムの利用

## 7. その他

### (1) eスポーツについて

「eスポーツ（エレクトロニック・スポーツ）」の認知度については、全体で約半数が「知っている」と回答している（図 45）。そして、全体の 19.1%が e スポーツを『スポーツ』として捉えている（図 46）。関心度も全体の約 3 割が「関心がある（「非常に関心がある」を含む）」と回答している（図 47）。関心の形態については、全体で『「みる」スポーツとして』が最も高いが、女性は、『「みる」スポーツ』、男性は、『「する」スポーツ』で高い割合となっている（図 48）。

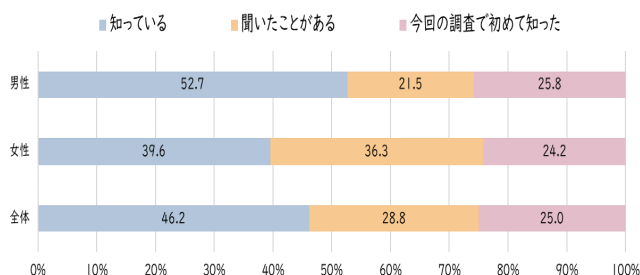


図45. e-スポーツの認知度

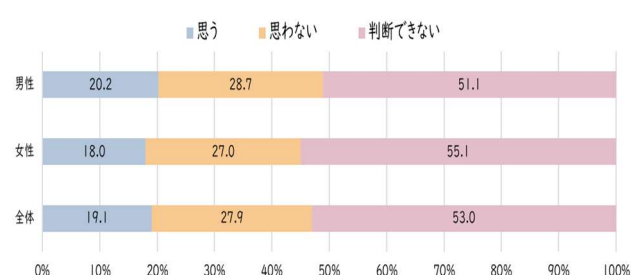


図46. e-スポーツをスポーツとして捉えているか

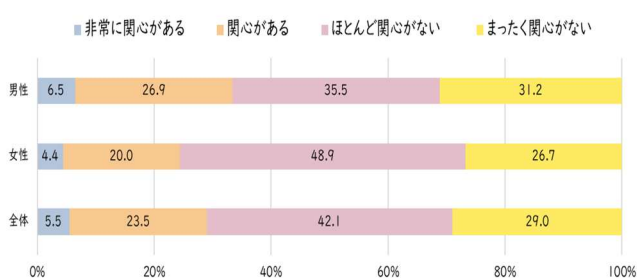


図47. e-スポーツへの関心度

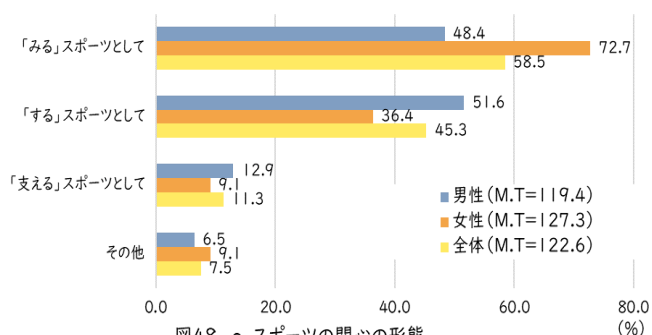


図48. e-スポーツの関心の形態

## (2) 障がいのある人のスポーツについて

障がいのある人のスポーツについては、「関心がある（「非常に関心がある」を含む）」が全体で 59.3%であり、前回調査の 40.5%から約 2 割の上昇となっている（図 49）。関心の形態については、前回調査時に全体で 6 割を超える値を示した『「みる」スポーツとして』が 5 割と低下しているものの、前回調査で 4 割であった『「する」スポーツとして』が 1 割増の 5 割を占める結果となっている。東京 2020 パラリンピック大会に続き、SAGA2024 全障スポ大会の好影響と本市の取組が相俟っての結果とみることができる（図 50）。

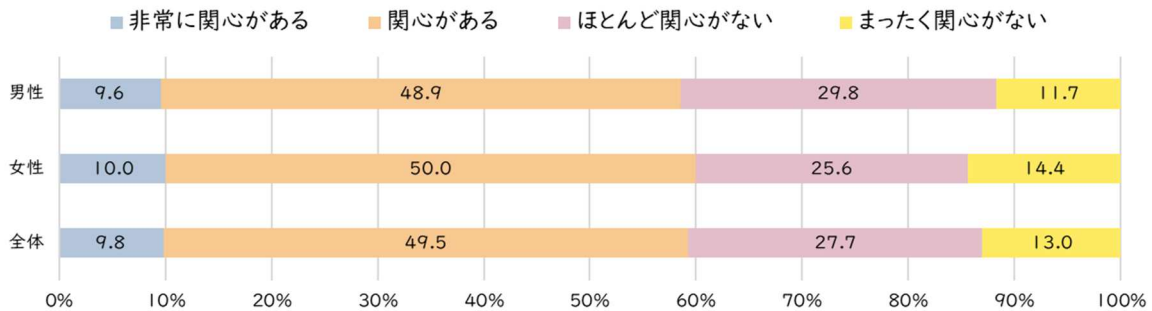


図49. 障がい者スポーツへの関心度

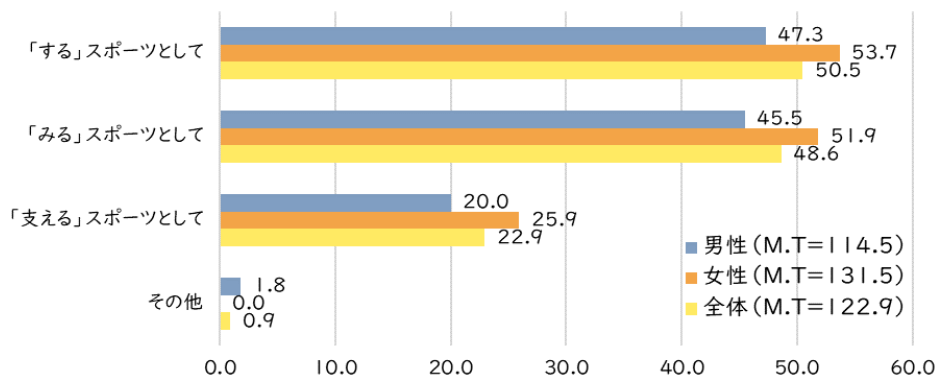


図50. 障がい者スポーツの関心の形態

パラスポーツ発展のために必要なものについて複数回答でたずねたところ、「障がい者が利用しやすい施設の整備」が最も多く、次いで「パラスポーツへの理解」、「障がいの有無に関わらず皆が一緒に参加できるスポーツプログラム」の順となっている（図 51）。

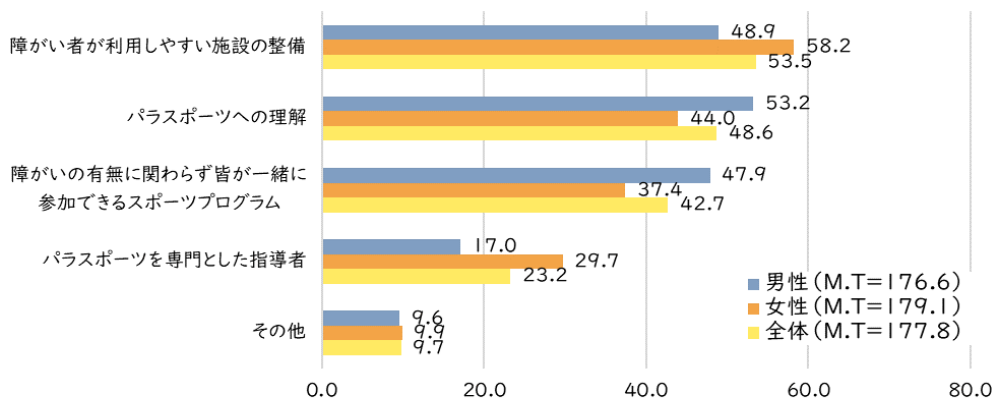


図51. パラスポーツ発展のために必要なもの

### (3) 市のスポーツに関する情報の収集について

市のスポーツに関する情報収集手段として最も高い割合を示したものは全体で「テレビ」であり、「市報」、「新聞・雑誌」が続いている。性別比較でも同じ順位となっている（図 52）。

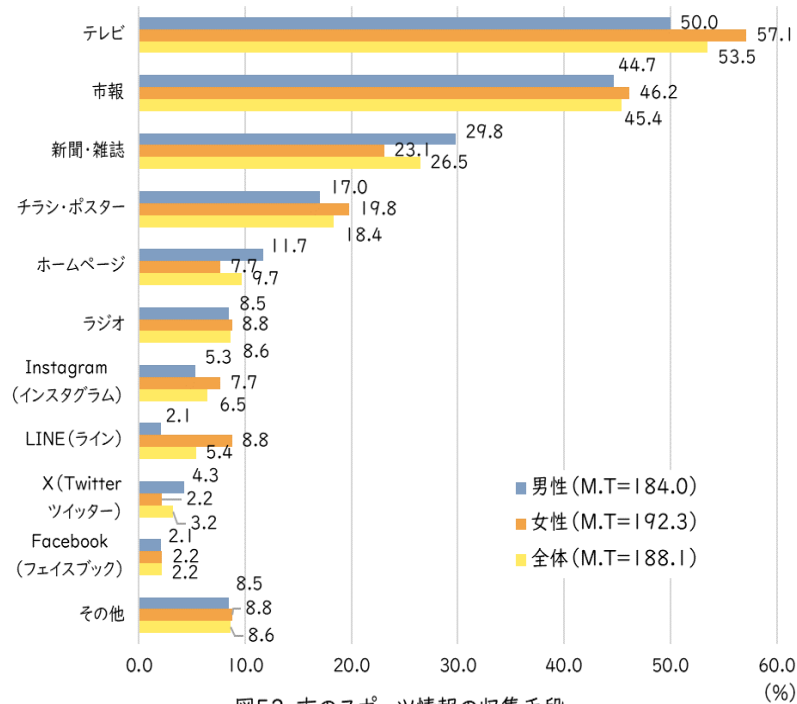


図52. 市のスポーツ情報の収集手段

### (4) スポーツ競技力向上のために重要なことについて

本市の選手・チームの競技力向上のために最も大事なことについてたずねた結果、最も選択が多かった上位2項目は、全体と性別比較も同様に「ジュニアアスリート発掘・育成事業の充実」、次いで「練習場所となる競技施設の確保」であった（図 53）。

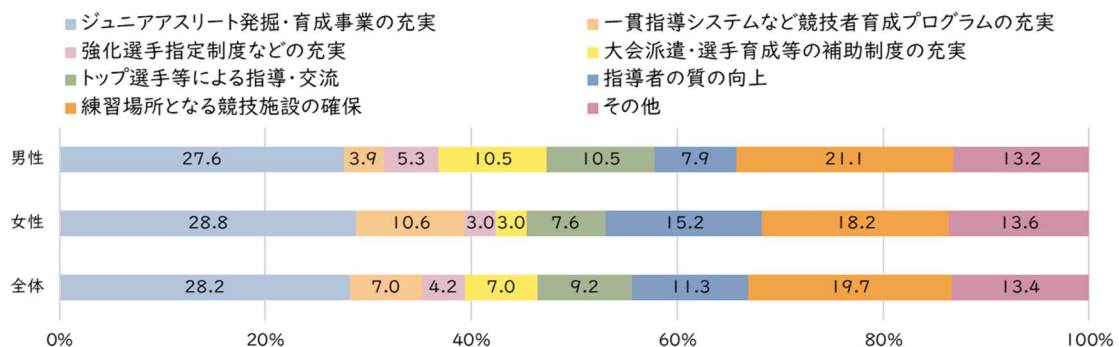


図53. 競技力向上のために最も大事なこと

### (5) アーバンスポーツ実施に向けた整備取組について

オリンピックの正式種目にも採用され、子どもや若者に人気が高い「アーバンスポーツ」に対する本市の実施場所の整備については、約半数が「賛成」を示し「反対」は僅かである（図 54）。

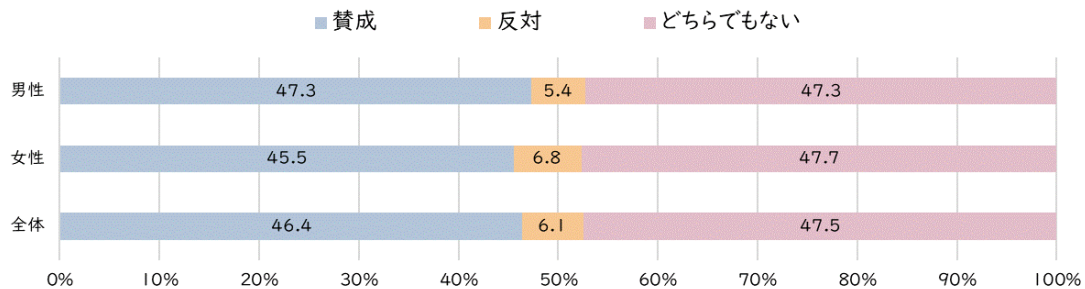


図54. アーバンスポーツ実施への取り組み

### (6) 学校運動部活動地域移行へのあり方について

国の取組の一つである「学校部活動の地域移行」に関連して、本市の運動部活動の地域移行のあり方の理想についてたずねた結果、「専門的で丁寧な指導が受けられる」43.2%、「いろんな世代や年齢の人と一緒に活動ができる」32.4%、「やりたい種目が選択できる」28.1%が上位 3 項目として挙げられた（図 55）。

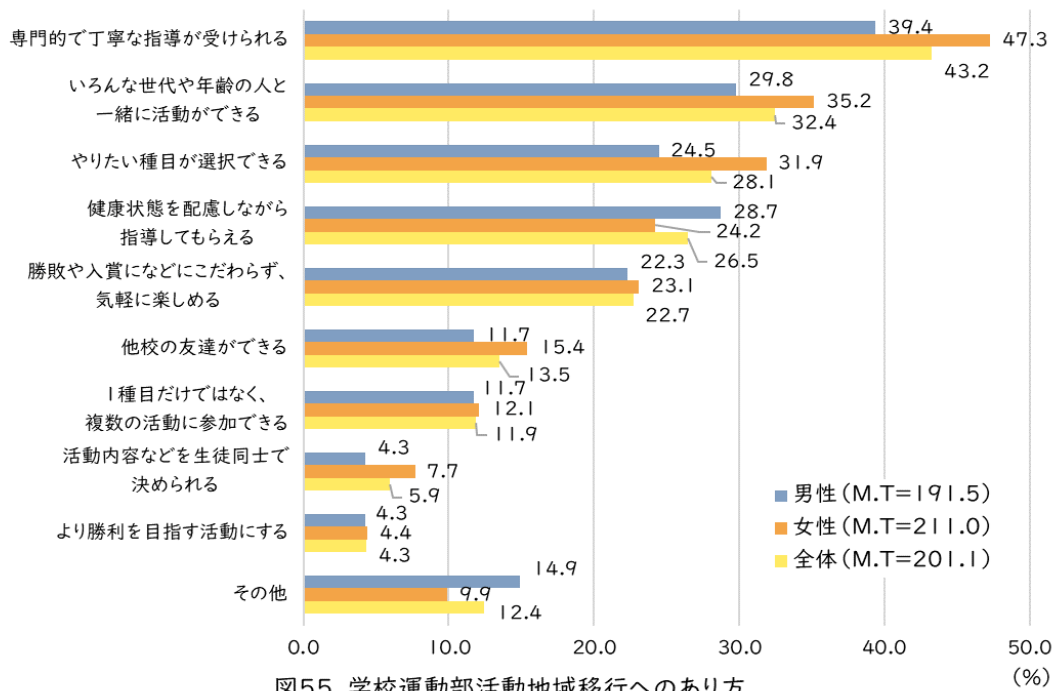


図55. 学校運動部活動地域移行へのあり方

【自由意見】佐賀市のスポーツ振興についてのご意見（一部抜粋）※文面は記載のまま掲載

「みんなが同じように」ではなく、多種多様が色んな世界や可能性を生み出しやすいと思います。	女性	50代
アリーナは夜遅くまでであると、帰りのバスがない。中極經由小城行は20時台までしかない。車を停めるところもないし、行きづらくなった。	女性	40代
運動することは楽しいです。人との交流もあり、けど、そこまで行きつくことは少し大変です。通勤してくる人は、そこまで行くのに時間がかかります。だれかが声かけてくれればいいのですが。他の県から来た人の意見をきいて、それを取り入れないと、流動的な考えはむずかしいと思います。その県や市だけのあんもくの方法があるみたいで。けど、がんばって下さい。	女性	40代
運動はすごく好きですが、外出をするのが苦手で交友関係がうまくいきません。	男性	40代
外国人選手や観戦者も増えているので、そこに対応できる人、関係者、プロモーションの充実があるといいと思う	女性	30代
健康運動センターの大人料金が高いため頻繁には行けない。健康運動センターのトレーニングルームは中学生が使えないのは不便。（大人同伴ならOKにしてほしい）	女性	10代
公園でキャッチボールができるようにしてほしい。今はできない所が増えた為、子供が子供らしく遊べる環境作りを。	男性	20代
シニアが興味を持つ様々なイベントの数をもっと増やしてください	男性	70代
重度障がい者（児）は自分での移動はできません。必ず家族か支援者が必要になります。会場まで行くことだけでなく、会場内でも不安などがあり、動けなくなることも多くあります。だれでもが楽しく活動できるスポーツをするのはとてもありがたいので、安全・安心に参加できるプログラムをぜひ作ってほしいと思います。（家族の負担が多すぎる）	男性	20代
小・中・高校生の皆さんには勉強だけではなくスポーツを通して何かを学んでほしい。そのためには幼少の時期にスポーツにかかわり将来の基盤を体験してもらいたい。	女性	40代
障害者も競技場で練習をもっとさせて欲しい環境を作ってほしい	男性	50代
障がいの有無、年齢、性別に関わらず、いつでも気軽に楽しめるスポーツ・場所があると嬉しいです。	女性	50代
人口が少なく良い指導者がいない。財政もゆとりがない。無理せず、何かの才能がある人がつぶれない程度に余り大がかりでない位が持続しやすいと思う。バスが早朝夜間が足りないのが難しい。無人の研究など色々して車がなくても移動に困らないようにしてほしい。それがないと運動に行きつけない。	女性	40代
スポーツができる事はいい事です。私は軽い運動しかできないので、ウォーキングや家でヨガやラジオ体操をして体力をつけています。障がいのある方が少しずつスポーツに取り組んでいけるといいです。	女性	30代
スポーツは社会全体や個人の人生を豊かにすると思います。これからもスポーツ振興に力を注いでいただきたいです。	男性	50代
だれでも気軽に出来るスポーツをふやしてほしい	女性	70代
もっと人材育成に力を入れ後継者を育てることが必要である。また広報をもっと行い、市民に知ってもらうようにする。	男性	60代
良い人材、優れている選手を県内で選出して育てる	男性	60代

## IV. まとめ

ここでは「する」「みる」「ささえる」スポーツの視点を中心に、前回調査及び今回の全体調査の結果と比較する形でまとめることとする。

### 1. 「する」スポーツ

普段の運動不足感について、「感じる」と回答した人は約 8 割となった（図 7）。次に、日常的（週に 1 日以上）に運動やスポーツを行っている人（以下、定期的実施者）の割合を見ると、全体で 41.9%を示し前回調査の 39.3%を 2.6%上回った（図 8）。一方、スポーツや運動を「まったく行わなかった」人（以下、未実施者）の割合が前回調査とほぼ同じ 4 割を占めていることから、定期的実施者と未実施者の 2 極化に陥らない未実施者への有効な取組が必要になる。

未実施者の理由については、全体で最も高い割合を示した「病気やけがをしている」（図 12）で象徴されるように、当事者のこれまでの経験などを踏まえ自身の心身の状態では運動やスポーツは無理という意識を持っていることが予想されるため、障がいがあっても（誰も）楽しめる運動やスポーツを体験できる機会を多く提供していく取組の継続的展開が求められる。

### 2. 「みる」スポーツ

テレビ視聴を含めたスポーツ観戦は約 37%が「週に 1 時間以上」行っており、前回調査より約 3%伸びている（図 15）。プロスポーツの直接観戦は約 20%が経験している（図 16）。日常生活との関係については、「話題として必要」、「生活を豊かにするために必要」としていることから、生活の中でのコミュニケーションの一部となっている様子が伺える。なお、「ストレス解消」の割合が高いことが特徴としてあげられ、SAGA2024 国スポ・全障スポの開催を通じて、「みる」ことを契機に、「する」スポーツへのスムーズな移行が可能となる対策が必要となるだろう。

### 3. 「ささえる」スポーツ

スポーツに対する意識が高まっていることから、スポーツ推進委員等をはじめ、総合型地域スポーツクラブの関係者等の地域スポーツ活動を支える立場の人々を対象に、障がいのある人及びパラスポーツに対する理解を深め、運動・スポーツ活動を支援・指導していくことにつながる研修会などを継続的に行っていくことが重要となる。

運動やスポーツ時にボランティアから支援を受けた経験のある人は、全体で 14.2%であり、前回調査を 3.7%下回った（図 25）、その際のボランティア支援に対する満足度に不満はなく、前回調査から改善されている様子が明らかとなった（図 26）。

### 4. その他

アーバンスポーツ実施に向けた整備取組については約半数が賛成している（図 54）。

障がいのある市民の運動・スポーツ実施場所は、「自宅・友人宅」を含め身近な場所であり、市立のスポーツ施設利用率が約 1 割となっている（図 37）。市立のスポーツ施設に対する要望は、「特にない」が約 5 割を占めたが、運動やスポーツ教室の充実を求める声などがあつた（図 43）。また、パラスポーツ発展のために必要なものに対する回答においても、「障がい者が利用しやすい施設の整備」が 5 割を超え最も高い割合を示した（図 51）。

本市の『スポーツ競技力向上のために重要なこと』（図 53）については、「ジュニアアスリート発掘・育成事業の充実」が最も高く、『学校運動部活動の地域移行へのあり方』（図 55）では「専門的で丁寧な指導が受けられる」の項目が最も多くなっている。

障がいのある人のスポーツについての関心度が 6 割を示し、前回調査より 2 割増加している（図 49）。関心の形態については、「する」スポーツが前回調査より 1 割増加の 5 割となり、前回調査で 1 位であった「みる」スポーツを僅かに上回っている（図 50）。

この結果は、障がいのある人のスポーツについて、東京 2020 パラリンピック大会や SAGA2024 全障スポ大会の開催を契機に、スポーツへの関心が高まったことが考えられ、地域の身近な場所で、スポーツが実施できるような環境づくり、きっかけづくりが必要であると考えられる。



## 第3次佐賀市スポーツ推進計画

令和7年3月

編集  
・  
発行

佐賀市地域振興部  
スポーツ振興課

佐賀市大財三丁目11番21号  
TEL:0952-40-7360 FAX:0952-40-7375  
E-mail:sports@city.saga.lg.jp

